

労働者党の結成(2) : チャーチズムの場合

著者	増島 宏
出版者	法政大学社会学部学会
雑誌名	社会労働研究
巻	4
ページ	110-154
発行年	1955-11-30
URL	http://hdl.handle.net/10114/8182

労働者党の結成 (二)

——チャーチズムの場合——

増 島 宏

- 一、はしがき
- 二、労働者階級の進出（以上前号）
- 三、チャーチズムの成立と発展
- 四、チャーチズムにおける「党」
- 五、むすび（以上本号で完結）

三、チャーチズムの成立と発展

1、人民憲章

一八三〇年には、すでに産業革命を経過したイギリスは、その広大な植民地の領有とともに、世界市場での独占的地位を確立しはじめていた。世界の石炭の産出の約七〇パーセント、鉄鉄生産の四三パーセントをしめ、鉄鉄の五四パーセントを消費していた。

た。こうした産業的發展を基礎として、ブルジョアジーは一八三二年の選挙法改正をもちとった。改革議会で勝利をえたウィックの政府は、さきにものべたように、グラランド・ナショナルに攻撃を加えることによって、改革運動の同盟者労働者階級に挑戦した。さらに、ウィック政府が行った「二つのイギリスの大改革、都市行政の組織と救貧法の再組織」のうち、一八三四年の新救貧法は労働者に未曾有の窮乏と惨虐を強いるものであった。労働者階級は『血に飢えたウィック党』に対する憎悪の焰を燃えたさせた。支配階級が救貧法の改革を必要とした第一の理由は、国家財政と地方財政の危機が急速に迫って来たためであった。すなわち、ナポレオン戦争後所得税を廃止した結果、一八三一年には租税収入四千七百万磅のうち、直接税はわずかに一二五〇万磅であり、残りの三五五〇万磅は間接税によるものであった。しかも間接税総

額の九三、三パーセントは茶、砂糖、タバコ、バター等の消費資料にかけられたものであった。⁽⁵⁾従って大衆は過重な租税負担に耐えかね、国家財政は不均衡を続けた。地方では貧困と窮乏はその極に達し、スビナムランド法による救貧費は増大し、多くの救貧区は殆ど破算しかけていた。一八二〇年代の中頃には四五〇万磅に下つていた救貧税は一八三一一三合計年度には七百万磅に増大し、地主や農場主は救貧税の増大に不満をうつたえていた。⁽⁶⁾

救貧法は財政的負担となるばかりではなかった。それは小生産者と機械制工業との競争をひきのばし、資本家にとっては、安い労働力が農村から都市へ供給される妨げともなった。支配階級は恐るべき不公平な租税負担の配分を維持しつゝ、しかも破滅した手工業者や職人、不況によつてなげだされた失業者、病弱者、老人、子供達の最後の生活のよりどころである救貧費をも奪いとりとしたのである。

新救貧法は、従来の院外救助を廃止し、救助を希望する者はすべて救貧院に入らねばならないようにした。しかも従来、救助は救貧区の手によつて行われていたが、新法では、一人の書記と三人の有給委員からなる中央の救貧委員会(これは「サマーセットハウスの三人の国王」とよばれ、憎悪的となつた)⁽⁸⁾を設け、救貧に関する行政は一切この委員会の統制に服するようようにした。救貧院はエンゲルスのいうように「マルサス主義者の狡猾な才能が

考え出すことができるかぎりのものともいふわしい住居」⁽⁹⁾として作られる。それは嚴重な監督官のもとに、夫婦親子の別なく、男女子供はそれぞれ別棟に隔離され、訪問者との面会は許可を要するという非人間的なものであり、強制労働と最も下等な食物が与えられる。まさにそれは人民がよんだように「救貧法バスターユ(Poor Law Bastilles) であり「貧困を犯罪として罰する」監獄であつた。⁽¹⁰⁾

この法案には、ウィックもトリーも中産階級の急進主義者もほとんど一致して支持を与えた。ただ労働者階級とコベットの急進主義者のみが確固たる反対を示した。そしてこの反対にはオーストラ(R. Oastler) スティープンス(J. R. Stephens)のような急進主義的トリーと、この法案の中央集権と官僚主義に反対し、それが地方の治安判事に打撃を与えるものであるとする一部のトリーの反対が加わつた。又新聞『タイムス』(The Times) およびコベットの『週刊ポリティカルレジスター』(Weekly Political Register) も法案に反対の論陣をはつたが、議会では八月、コベットの率いる小数の急進主義者の反対を排して、遂に可決された。

しかし、議会でも地方でも反対運動はますます熾烈となつた。議会では、この法案の名づけ親ラッセル卿(Lord J. Russell)によびかけるフィールドン(J. Fielden)の、次のような演説が行われた。

『私は諸君に敢えていうが、新法を私の選挙区に実施すれば反抗に出合うであろう。そして私はもしそれが必要な場合には、私自身運動の先頭に立つということを憚らない。メッカ王の杖も警官の棍棒ももはや公共の秩序を暴行者から保護しえなくなつたほど事態は既に急迫したので、我々自ら防衛することは我々の義務であり、私は私の責任部分をひきうけるであろう』と。小教ではあるが、何者にも動じないこれらの演説は民衆の共感の嵐をよび起した。新法に対する反響は全国に拡大された。南部および東部の所謂スピナムランド地方では、かえつて抵抗は少かつた。それは一八三〇年の『最後の労働者暴動』と一八三四年のドーチェスター労働者の流刑によつて、農業労働者が抵抗の力を失つていたこと、先進的労働者が移民あるいは都市へ移住してしまつたためであつた。それでも各地に散発的な暴動をひきおこした。北部の工場地帯では反対は激烈をきわめた。こゝでは工場賃金を救貧費で補う習慣がなかつたので南部に比して救貧費は少かつたが、たえず賃金の下落しつゝあつた手織工や職人、多くの失業者にとつては、救貧費が生活の唯一の支柱であつた。一八三七年委員会が新法の施行を北部に開始しようとしたことから、反対運動は焰の勢で燃え上つた。一八三六年以来の不況はこれに油を注いだ。各地で松明(松)をかざした十萬―二十萬の野外大集合が催された。ヨークシャー (Yorkshire) の指導者オーストラーは次のように語つた。

『私は諸君に熟慮の結果を語ろう。もし私が貧困の不幸に陥るならば、神が私とひき合せてくれた妻を私から引き離そうとするその男を、力のある限り、私のこの手で叩き殺してしまふであろう。もし私が貧困なるが故に、地獄のような救貧法バスチーユに閉じこめられ、妻が私からひき離されるならば、私はできることなら柱という柱を地上に焼き落してしまふであらう。……』

爾今、私はこの法によつて課せられたいかなる税金も払わないし、非国教徒が教会税に反対したように抵抗するであらう』と。牧師ステイトブンスのニューカッスル (Newcastle) における火を吐くような演説は民衆の大喝采によつて、しばしば中断されるほどであつた。

『国民はこれを我慢する筈はない。私は敢て言おう。夫婦親子がひき裂かれ、牢獄に投ぜられ、ごみを食わされ、妻や娘が囚人服を着せられるようになる前に、そうなるよりはむしろ、ニューカッスルはこの憎むべき政策を支持したすべての人々の血によるほかは消しとめることのできないような、火の海としなければならぬ』と。

北部の指導者のこのような演説の調子は、労働者階級の激昂を表明するものであつた。各地で軍隊と群衆との衝突が起り、救貧院は破壊されたり、焼き払われたりした。一八三九年の委員会の報告によれば、

『救助に使われる金額の五分の四は現在もなお院外救助につかわれている』⁽¹⁸⁾と。

このことによって人民の抵抗がいかに熾烈であったかがわかるであろう。北部の工業都市の多くは一年以上も経て、やっと新法を正規に適用することができた。特にフィールデン兄弟の指導のもとに、あらゆる官憲の弾圧をかって反対したトットモーデン (Totternorden) では三十年後によりやく救貧院を建てることができたほどであった。

このような大衆的抗議運動のなから、各地に『反救貧法協会』 (The Anti-Poor Law Association) が生れた。なかでも『ハッダースフィールド協会』 (Huddersfield Association) はオーストラリーの強力な支持をうけた最も活動的な団体の一つであった。それが救貧委員の選挙にあたって、投票をボイコットするようによびかけた宣言の一つは次のようにのべている。

「納税者の諸君、諸君の義務を果せ。地獄のような法律に少しでも適した奴を決して選挙するな。この法律は貧民にとっては、零落と徹底的な飢餓を強いる惨酷な、不法な、憲法に反したものであることを忘れるな。その真の目的は一層低い賃金と、貧困を犯罪として罰することである。又子供や親達がお互いに会うこともできず、お互いの運命を知ることもしなすに、同じバスチーユの中でしばしば死んで行くのだということ忘れるな。」⁽¹⁹⁾

このような反救貧法協会は各地で大衆運動を指導した。そしてこれらはやがて、急速にチャーチスト運動に結合していったのである。

以上のべてきたように、北部の工場地帯を中心として、新救貧法反対の運動が野火のように拡大しようとしているとき、『ロンドン労働者協会』 (The London Working Men's Association) が設立された。一八三六年六月のことであった。嘗て労働者に輝かしい希望と夢を与えたオーエン主義は、すでに大衆運動としての存在をやめ、改革運動の指導者コベットは、救貧法への国民的レジスタンスのよびかけを最後に一八三五年世を去っていた。又選挙法改正運動以後、多くの政治同盟は嵐のうちに解散していった。このようなときに、L・W・M・A (ロンドン労働者協会) が設立されたのである。その中心は主に熟練職工のタイプの人々であり、『全国労働者階級同盟』⁽²⁰⁾ 『協同組合運動』⁽²¹⁾ 『新聞税反対運動』⁽²²⁾ の指導的な人々であった。オーエンを含む小数の中産階級の人々が名誉会員となり、フランシス・ブレースは顧問であったが、運営はウィリアム・ラヴェット (William Lovett) を指導者とし、ジョン・クリーブ (John Cleave) ⁽²³⁾ ヘンリー・ヘザリントン (Henry Hetherington) ⁽²⁴⁾ が当り、更に弁士として、ヘンリー・ヴィンセント (Henry Vincent) ⁽²⁵⁾ ジェイムス・ワトソン (James Watson) ⁽²⁶⁾ ジョージ・ジュリアン・ハーニー (George Julian Harney) ⁽²⁷⁾ 等の労働者が参加した。北部の指導者、ファーガス・オコンナー

(26) (Feargus O'Connor) もすでに名譽會員として名を列ねていた。

最初この団体は都市、農村の知識あり有用な労働者の統一、社会のあらゆる階級の政治的社会的平等、安価で正しい新聞、その他労働者の教育、賃金と生活の向上、情報⁽²⁷⁾の交換等を目的として設立された研究と宣伝の団体であった。その初期の活動のうち注目すべきものは、一八三六年ベルギー労働者階級への挨拶を送り、数人の逮捕された労働者への同情を表明したことである。又『腐敗した下院』(The Rotten House of Commons) と題するパンフレットは不公正な議会制度に対するすぐれた洞察を示していた。やがて各地に改革運動の息吹が起るや、議会に対する大請願を計画し、一八三七年七月二十八日には、ロンドン・ストランドのクラウン・アンド・アンカー (Crown and Anchor Tavern in the Strand) で大会を開いた。この大会にはロンドンの労働者の上層三千名が出席し、錚々たる急進主義議員も出席した。大会では議長ハートウェル (R. Hartwell) ラズウェットはともに『労働者は自分自身の力に信頼せねばならぬこと』を強調していた。ヴィセント、オコンナーその他の労働者も演説した。又大会は既に二月二十五日委員会により発表されていた議会への請願書を採択した。これには、普通選挙、年次議会、無記名投票、平等選挙区、候補者の財産資格の廃止、議員才費の支払の改革案を含んでいた。⁽²⁸⁾ 次の週、議会に請願書を提出することと、これを法案の形式にするための集会が開かれ、ハートウェルの決議案を採択した。これ

には急進主義者の下院議員と協力して法案起草すべき代表が指名されていた。かくして六名の L・W・M・A の代表者と六名の下院議員よりなる合同委員会が成立することとなった。

又 L・W・M・A は地方支部の要請に応じて、北部の工場地帯にオルグを派遣した。ヘザリントン、ヴィンセント、クリーヴがこの使命をひきうけ、各地で熱烈に迎えられた。ランカシャー (Lancashire) ヨークシャー (Yorkshire) ダーラム (Durham) ノーザンバーランド (Northumberland) に組織が結成された。運動は次第に大衆的基礎を得つゝあつたのである。

更に L・W・M・A が国際連帯性の精神を以て、英国の植民地問題、カナダ自治運動、ポーランド問題を早くもとりあげ、バスターンの外交政策を非難していたことは注目しなければならぬ。労働者階級の伝統は最初から反帝国主義的であつた。

一方、一八三六年英米をおそつた恐慌の影響を最もはげしくけたグラスゴー (Glasgow) バーミンガム等の製造工業の中心地は不況のどん底に陥つた。グラスゴーでは綿紡績職工をはじめ、多くの職業の大ストライキが行われ、数十名の紡績工が逮捕された。⁽³⁰⁾ この事件とその裁判は労働者階級の強い支持をうけた。バーミンガムでは一八三七年の春『バーミンガム政治同盟』(The Birmingham Political Union) が復活した。その指導者は議会改革運動の当時と同じくアットウッド (T. Attwood) であつた。一八三七年の、その請願書によれば、

『1、金本位を復活した一八一九年のピール法案の廃止

2、一八一五年の穀物法をはじめ、穀物輸入を禁じた諸法令の撤廃

3、新救貧法の廃止

4、戸主選挙権

秘密投票

三カ年期限の議会

議員への歳費の支払

候補者に対する財産資格の撤廃⁽³¹⁾

を目的としたものであった。これによっても最初は中産階級が指導権を握り、その要求を中心とし、労働者階級の要求を附加したものであることが明白である。この同盟にはジョン・コリンズ⁽³²⁾ (Collins) に指導される労働者階級の一派も加わっていた。そして政治同盟はますます多くの労働者大衆の支持を獲得するようになった結果、やがて、その主たる精力を普通選挙の要求に注ぎようになった。一八三八年四月にはグラスゴーに使者コリンズを派遣した。五月二十一日のグラスゴーの大衆集会では、ロンドン、バーミンガム、スコットランドの工業中心地の代表が参加し、十五万の人々がアットウッド等の演説に耳を傾けた。又この大会にはL・W・M・Aの二名の代表、綿紡績工の斗争の英雄ムニッシュ⁽³³⁾ (Munish) も参加した。このグラスゴーの大会は、ロンドン、バーミンガム、グラスゴー、スコットランド等の運動が次第に一

つの流れに統一しつゝあることを証明するものであった。バーミンガムの『国民請願』は全国的請願運動の結集点であり、ロンドンの『人民憲章』は法案の形になった民主的参政権の計画を示すものであった。この二つの文書は極めて急速に国民の希望をとらえていった。

『人民憲章』は、形式を整えて、出版されたのはグラスゴー大会の少し前五月八日であった。しかしながら、その実際の起源は先にもしるしたように一八三七年二月のL・W・M・Aの大会であった。このとき採択された請願は国王の死と議会の解散によって中止のやむなきに至った。そしてL・W・M・Aはこの年の末の総選挙には、ウィックにもトリーにも投票せず、六カ条を支持する候補者に投票するよう強く訴えていた。こえて一八三八年さきに採択された請願書を基礎として、ラヴェットが草案を作り、プレスとローバックが手を加え、合同委員会がこれを決定して、発表されたのである。

その六カ条は次のようなものであった。

- 1、二十一才の健全で前科のない男子すべての投票権
- 2、秘密投票 (The Ballot)
- 3、議員の財産制限の撤廃 (No Property Qualification)
- 4、議員の有給 (Payment of Members)
- 5、平等選挙区 (Equal Constituencies)⁽³⁵⁾
- 6、毎年の議会 (Annual Parliaments)⁽³⁶⁾

この六ヵ条は、既に労働組合では早くから問題にされており、ラヴェット自身も加えることを主張していた、男女平等に基づく婦人の参政権を含まず、又何等社会経済綱領を含んでいなかった。それは、『その形式からいって純粹に政治的なものであり、下院に民主的基礎を与えることを要求した』⁵⁶極めて単純化されたものである。しかしながら、この六ヵ条の要求の単純さは、決してチャーチスト運動そのものの単純さを示すのではない。むしろ人民憲章の旗印のもとには、種々様々な潮流があった。すでにのべたように、先づ運動の大衆的基礎をなしたものは、北部の工場地帯の救貧法反対運動であった。こゝでは新しく形成された工場労働者—纖維労働者—およびスコットランドの鉱山労働者を主力とし、機械によって職をおわれ、不況によって職を失った手工業者や失業者の群が、これに従った。中でも初期には、『徐々に苦しみながら死んで行く階層』⁵⁷手織工は、悲壮な闘いを行った。ブーマンス・ガーディアン (The Poor Man's Guardian) は次のようにその窮状を訴えていた。

『約八十万の手織工のうち、数万の者は週五シリング六ペンスをうるができないし、それらのうちから彼等は家賃として二シリング払わねばならないのだ。』⁵⁸と。

彼等は、ステイヴンス、オーストラ等⁵⁹の激烈な行動のよびかけに多くの期待をかけ、大衆的煽動家オコンナーの演説にその希望を見出した。この北部の工場労働者が大衆的基礎をなしたのに

対し、初期の段階でその指導的役割を果たしたのは、ロンドンの知的労働者の一群であった。これはラヴェット、ヘザリントンを中心とする熟練職工と、少数の親方手工業者、小店主、宿屋の主人等の下層中産階級の要素が加わったものであった。彼等は北部の激しい階級斗争に反対すると共に、オーエンの平和的な社会改革にも反対していた。このL・W・M・Aから、ラヴェット等の不徹底なゆき方に反対した左派のグループが分裂した。その中心はジュリアン・ハーニーであり、ブロンテール・オブライエンもこれに加わった。彼は後にオコンナーのノーザン・スター (The Northern Star) の主要な執筆者となった。

又チャーチスト運動の隊列の中には、初期の運動にL・W・M・Aとともに大きな役割を果たしたバーミンガム政治同盟に代表されるような中産階級の分子やローバック型の急進派議員もいた。彼等は憲章そのものよりはむしろ、貨幣改革、穀物法廃止に関心をもっていた。しかしながら彼等は是等の要求をかちとるためには、労働者階級の行動力を必要とすることを知っていた。それ故に憲章も認め、時には十時間法案にも協力を惜しまなかったのである。

更に資本と工場主の専横に憤る一群の保守主義者もいた。ステイブンスのように積極的な役割を演じた人々もあり、又控え目な労働者への同情を表明した人々もいた。こうした様々な階層の人々が参加し、多種多様な潮流が渦巻く中に、六点 (Six Points)

に要約された人民憲章の旗が高く掲げられたのである。それは、⁽⁵⁶⁾モンドのいうように、

「憲章は種々様々な不満の集中的旗印となった。」のである。

それは又労働者階級の闘いのより高度な形態でもあった。エンゲルスは次のようにのべている。

『チャーチズムは、ブルジョアジーに対する反対の緊密な形態である。組合やストライキにあっては、反対はいつまでもたつても個々バラバラのままであった。そこでは個々の労働者または労働者の個々の部分が個々のブルジョアに対して闘ったのであった。闘争が全般的闘争に拡大したときでも、それが労働者側の計画によることはほとんどなかった。……ところがチャーチズムにあっては、全労働者階級がブルジョアジーに対抗してたちあがり、なによりもまづブルジョアジーの政治権力、ブルジョアジーが自分のまわりにたてめぐらした法律の壁に攻撃をかけるのである。』⁽⁵⁷⁾

チャーチズムのこうした性格が明確になるまでには、まだ運動の発展を必要とする。今はまだ「人民憲章は大衆の激情の魅力的焦点、新しい明白な政治運動の盛り返す基礎をなした」⁽⁵⁸⁾にすぎない。

- (1) B. H. Lehn, *Op. cit.*, T. 22, CTP. 271.
- (2) Ralph Fox, *The Class Struggle in Britain*, part I, p. 7.
- (3) J. L. and B. Hammond, *The Age of the Chartist*,

1930, p. 55.

(4) Th. Rohnstein, *Beiträge zur Geschichte der Arbeiterbewegung in England*, S. 25

キーンズ (O'Connell) の言葉

(5) A. L. Morton, *A People's History of England*, p. 398. Th. Rohnstein, *op. cit.*, S. 26.

(6) A. L. Morton, *op. cit.*, p. 399.

(7) K. Marx, *Das Kapital*, S. 761.

(8) A. L. Morton, *op. cit.*, p. 400.

'Three Kings of Somerset House'

(9) Marx, Engels on Britain, p. 322.

Engels, the Condition of the Working Class in England

(10) The Northern Star, March 10, 1838.

'The Address of the Anti-poor Law Association Committee'

(11) Hansard's Parliamentary Debates, 24. February 1836.

(12) J. L. and B. Hammond, *The Village Labourer*, vol. II, Chap. X, XI.

(13) R. Oastler, "Damnation! Eternal Damnation to the Fiend-begotten Carser-Food New Poor Law," 1837, p. 10.

(14) R. G. Gammage, *History of the Chartist Movement 1837-1854*, London, 1894, pp. 56-57.

(15) Sir J. Graham's Speech, House of Commons July 20. 1842. and February 23. 1843.

- (16) The Northern Star, March 10, 1838.
- (17) 前号六三頁参照
- (18) 前号「社会主義と大労働組合」の項参照
- (19) J. L. and B. Hammond, The Age of the Chartist, p. 267.
- G. D. H. Cole and A. Filson, British Working Class Movements, pp. 295~296.
- アン女王以来新聞税は六ペンスを下つたことはなかつた。コベットやラジカルズはこの廃止運動を盛にした。新聞税は一八一九年の『ビールの反動六法』で強化され、選挙法改正後も維持された。一八三〇—一八三六の間、五〇〇人が無印紙の新聞を売つて逮捕された。こうした運動の結果一八三六年一ペンスとなり、一八五五年廃止された。
- (20) William Lovett (1800~1877)
木工の熟練工、オーニンの協同組合店の最初の創立者、コンソット、ハント等のラジカルズとも結んでゐた。
- (21) John Cleave (1792~1847)
コンソットの後継者であるとともに、協組運動にも従つた。主としてラジカルズの新聞事業に當つた。
- (22) Henry Hetherington (1792~1849)
工手学校第一期生、ロムニンの知識労働者の一員、一八三〇年 Penny Paper for the People を発行した。これは後に Poor Man's Guardian となつた。新聞紙税反対の最も積極的な斗士で、そのため六ヶ月の刑に服した。
- (23) Henry Vincent (1813~1879)
植字工、ロンドンで最も人気のある雄弁家であつた。後に活動をウェールズに移し、一八三九年五月、一八四〇年三月と二度投獄され、合計二〇ヶ月を獄中で過した。一八四二年以降は急進主義の政治家となつた。
- (24) James Watson (1799~1874)
エトキシヤの労働者の家に生れた。コンソット、カーライルの感化をうけ、一八二二年煽動的な文書を頒布したため三ヶ月の判決をうけた。
- 二六年オーニン主義者となり、ロンドンの組合の最初の支配人の一人となつた。一八三二年オーニンの反議会主義の方針に反対した。一八三三年再び禁錮六ヶ月の刑をうけた。
- (25) George Julian Harney (1817~1897)
十一才より十四才まで王室海軍兵学校で教育をうけた。一八三三年ブライアンズガーズをよみはじめ、ハザリントンともに新聞紙税反対運動に加わり数回逮捕された。一八三六年には禁錮六ヶ月、彼はオブライエンを『自己の指導者、哲学者、友人』として尊敬し、ヘラーは彼の理想であり、ハンボリーのパンフメントを熟読してゐた。
- (26) O'Connor Feargus Edward (1794~1855)
フイナランズの民族運動を行つた政治家 Roger O'Connor (1762~1834) の息子であり、又同じ独立運動者 Arthur O'Connor (1763~1852) の甥で、早へから、オニニン・オニネンを熱心に支持してゐた。
- (27) W. Lovett, Life and Struggle of W. Lovett, p. 92.
Place MSS., 27, 819 f. 31 (1836) selected in, G. Cole and A. Filson op. cit., pp. 346~348.
- (28) M. Beer, A History of British Socialism, Vol. II, pp. 26~27.
- (29) True Sun, March, 1, 1837. (Ibid., p. 27.)

- これはカートライトの綱領の六ヶ条からとつたものであつた
(前号五八頁参照)
- (36) M. Morris, From Cobbett to the Chartists, pp. 104
~107, 参照
- このグラスゴーの綿紡織工のストライキとその裁判は、工場
地帯にチャーチスを成立させる上で大きな意義をもつた。
- (37) Birmingham Petition, 1837 の要録
- (38) Selected in, G. Cole and A. Filson, op. cit., pp. 349~351.
- (39) John Collins (1800~1850)
- 機械工、銅工、工場主十名の代表者一日十一十六時間働いた。
ライオンと綿糸があつた。
- (40) S. Maccoly, English Radicalism 1832~1852, p. 166.
- (41) Lovett, op. cit., p. 102.
- このライオンと綿糸の起原がこの大会にある
ことを示す。
- (42) From a Handbill, selected in G. Cole and A. Filson,
op. cit., pp. 352~353.
- (43) Marx Engels on Britain, p. 263
- (44) Hammond, op. cit., p. 269.
- (45) Poor Man's Guardian, November 14., 1835.
- (46) Hammond, op. cit., p. 268.
- (47) Marx Engels on Britain, p. 263.
- (48) R. W. Postgate, The Builder's History p. 117.

2. コンヴェンション (Convention)

グラスゴーの二十万の大会につづいて、ニューカッスルでは八

万、リーズ二十五万、マンチェスター三十万の大集会が相ついで
開かれた。⁽¹⁾各地でパーミンガムの五ヶ条の請願、人民憲章がとも
に可決され、アットウッドの提議した全国民の代表者の大会(コ
ンヴェンション)数百万の署名のある議会への請願、否決された
場合はゼネストの闘争方針は松明⁽²⁾行列の熱狂のうちにうけい
れられた。そしてこれらの大会の様子や演説の内容は、『ノーザ
ン・スター』(Northern Star)『ノーザン・リヴェイター』(Nor-
thern Liberator)『チャムピオン』(Champion)『ヘザリント
ンズディスパッチ』(Hetherington's Dispatch)等の週刊紙によ
つて広く国民の間に伝えられた。一八三八年の秋には、コンヴェ
ンションへの代表の選出がよびかけられ、請願とコンヴェンシ
ョンの準備が行動の目標となつた。

運動の発展とともに、内部の対立が目立つてきた。それは主と
して、北部の工場地帯の指導者オコンナー、ステイブンスに対す
るラヴェットを中心とする L・W・M・A、アッドウッド等のパ
ーミンガム派の反対であつた。ステイブンスはマンチェスター
の大集会で次のように述べた。

『諸君は政府の権力を、諸君の抑圧者達が自由に使うる兵
士、銃剣、大砲を恐れるにはあたらな。諸君はこれらの一切
のものよりはるかに強力な手段を、銃剣も大砲ももの数でな
い武器をもっている。そしてこの武器は十才の子供にでもつか
いこなせるのだ。諸君は二、三本のマッチとチャンに浸した一

束の蘆をもちさえすればよい。そして、この武器が大胆につかわれるとき、政府とその何十万の兵隊どもが、この一つの武器に對してなにをやるのかいものである」⁽²⁾

こうした武力的反抗をも辞さないという激越な調子は、多くの反對をうんだ。彼に對するオコンナーの強い支持にもかかわらず、バーミンガム政治同盟は、ステイブンスを運動より除外することを要求し、次のような決議を行った。

「本同盟は普通選挙及国民請願書その他の目的をうるために、実力を奨励することを一切断乎として排撃する」⁽³⁾と。

ラヴェットもまた実力行動に反對した。

「すべて実力行動の煽動は運動に有害である。必要なものは銃ではなくて労働者の教育訓練である。ステイブンス、オコンナーは前後を転倒して運動を妨害するものである」⁽⁴⁾と。

スコットランドの代表者会議も「実力に訴えること、武器の購入を奨めることを断乎として排撃する」⁽⁵⁾との決議を行った。これに對して、オコンナーの意見はこうであった。

「道徳的勇氣について語り、実力を非難する一団の人々がでてきた。……私は道徳力について、哲學的急進主義者、と同じような見方をしていない。……彼等は新聞に強力な論文を書くことを道徳力だと考えており……その旗印には、平和、法、秩序、と書いた。私はこの標語には高らかに賛成である。もし平和が法をもたらすならば、私は秩序の味方である。しかし平和が法

をもたらさないならば私は無秩序の味方である……」⁽⁶⁾と。そしてオコンナーはロンドンの職工に對して次のように語っていた。

「彼等とはや労働者ではない。我々は剃刀のあたため顔と荒れた手の持主で、コールテンの服を着た真の労働者に訴える」⁽⁷⁾と。

以上のような対立の原因は、実力、と道徳力、との対立の問題だけではなかつた。北部の工場労働者にとつては、

「普通選挙の問題はナイフとフォークの問題であり、結局パンとチーズの問題」⁽⁸⁾であり、六カ条はそのための手段であつた。

これに對してアットウッド等の急進主義者にとつては、六カ条はそのほとんどすべてであり、そのほかは、せいぜい二、三の憲法の改正をもたらすものであつた。L・W・M・Aのラヴェット等は多かれ少かれ彼等の影響下にあつたのである。こゝから分離して「ロンドン民主主義協会」(The London Democratic Association)を結成したハーニー等の機関紙「ロンドン・デモクラット」(The London Democrat)は次のようにのべた。

「卑劣で、偽善的で裏切的なブルジョアジーは運動を分裂さすためにのみそれに参加するブルジョアジーが曾て着手したすべてのことは国民の損害となり、虚偽と欺瞞であることがわかつた。それ故に社会を改新せんとする創造的階級は、自分自身にたゞ自分自身にのみ信頼すべきである」⁽⁹⁾と。

こうした対立が更に激化し、次第に運動の主導権が北部の労働者に移っていったのは、一八三九年二月のロンドンにおけるコンヴェンション以後であった。

Convention もしくは Chartist Convention, The General Convention of the Industrious Classes, 又は National Convention という言葉がロンドン大会の種々の呼称となっている。しばしば呼称は内容と一致しないものであり、又チャーチスト運動のように、様々な流派が存在した場合、各流派によって、その会議の性格と目的とに対する見解が異なるのは当然である。しかしながらこの呼称に共通なコンヴェンションには単なる会議と異つた特別の意味があるようである。一六六〇年および一六八八年に国王の召集なしに集合した英国の議會はコンヴェンションと呼ばれ、フランス革命の際の國民議會はナショナルコンヴェンションとよばれた。又一七九二年にはフランス革命の影響のもとに、エジンバラで急進主義者のコンヴェンションが開かれた。

さて、チャーチストはコンヴェンションに一体何を期待したのであるうか。エンゲルスは次のように指摘している。

「労働者がすくなくとも法律の改正についての提案をもつて、ブルジョアジーの法律のかわりにプロレタリアートの法律を制定しようとすることは、このうえもなく自然なことである。このようなプロレタリアートの提案になる法律こそ人民憲章である……。チャーチズムにあつては、全労働者階級がブルジョア

ジーに対抗してたちあがり、なによりもまずブルジョアジーの政治権力、ブルジョアジーが自分のまありにたてめぐらした法律の壁に攻撃を加えるのである。」と。

人民憲章を法案の形にして提出するという考え方は、まさにエンゲルスの指摘する通り、「ブルジョアジーの政治権力」への一定の攻撃を指向するものであつた。では、議會にこの法案を承認させるためにはどうするか。そのためには先づ大会を開くべきだ。彼等はこう考えていた。従つて彼等がコンヴェンションを明白に議會に対立する立法機関、あるいは人民の権力機関にしようとする意図をもっていたとは考えられない。しかしながら、オブライエンの「人民議會」の計画にみられるように、漠然とではあるが人々の心の背後には、

「より広い選挙権の上に立ち、より真実に民衆的な委任をうけた人民の議會からのウェストミンスター議會への挑戦」

の意図をもっていたことは確かである。又この考えは、オーエンのグラランド・ナショナル、或いは「勤労階級の議會」と同一のものを含んでいる。チャーチズムにあつては、よりすんで、全労働者階級の政治的統一のもとにブルジョアジーの政治権力への直接的攻撃の指向をもつて来ているのである。コンヴェンションは漠然とではあるがこの労働者階級の意図を表明するものであつた。しかしながら一方、コンヴェンションのこの性格の不明確さと、コンヴェンション以後の戦術に関する意見不一致が「大会」

を混乱に終らせた一つの要素ともなっているのである。

先づ『大会』の構成は、各地の大衆集会で選出された五三名の代表者よりなり、それは労働者、ジャーナリスト、裁判官、僧侶、医師、商人等の極めて多様なものであった。⁽¹⁴⁾このような幅の広い統一を守り、全チャーチストの運動を指導することは困難なことであった。ましてや、この『大会』を実行行動の司会部にすることとは到底不可能であった。又『大会』には農業労働者の代表は一人も参加していなかった。従つて運動を真に全国民的な規模で行うことはできなかった。

『大会』は最初から波乱と対立緊張の連続であった。その対立の中心問題は、もし議会が請願書を否決した場合にとるべき。将来の手段についてであった。二二才の青年ハーニー等八名ははじめから武装行動を主張した。ハーニーは次のようにいつていた。

『憲章をうるには、真実に唯一の途叛乱あるのみである。』⁽¹⁵⁾と。

三月以来、ハーニー、ライダー、マースデン等の代表者はロンドンで会合を開き、武装反抗の準備を訴えていた。三月十一日、ロンドンストランド、クラウンアンドアンカーの民衆大会に臨み、フロスト、オコンナー、ハーニー等は鋭い語調で来るべき戦闘に用意することを訴えた。又ハーニーの主宰するロンドンデモクラート紙にはポーランドの叛乱から亡命したベニオウスキー (M. Beniowski) のポーランド革命の戦術、あるいは大会の無価値、

武装行動の準備についての論説が掲げられた。

このような情勢の中で合法的平和的手段を主張する右派のハドレー (Hadley) サルト (Salt) ダグラス (Douglas) 等は『大会』を脱退した。かくして、『大会』は武装する権利に關しての討論を行ったが、最後に

『この国の人民の武装する権利が法律上の最高の權威によつて確立されていることは疑いの余地がない。』⁽¹⁶⁾という動議を採択した。

これは武器を所有する法的権利に關して、弁護士意見を求め、判例をひきだすための委員会を指名すべきだという動議に対する修正動議として出されたものである。その採択は次のようであった。修正案賛成十九、動議賛成四、待期尚早の問題とする者六であった。このような抽象的武装論が運動の前進に何の役に立つであろうか。ベアーは次のようにのべている。

『此の討論の實際の原因は、請願書が議会にうけつけられる機会がないとの信念に到達したことであつた。是は議員と交渉するために任命された委員によつて大会に提出された報告の要点であつた。武装する権利に關してなされた声明は議会对する示威運動であり、抗議であつた。』⁽¹⁷⁾と。

すでに左派のハーニー等によつて武装の準備がなされ、内務省には労働者が武器を購入し、違法な訓練を行っているという報知が多く、の地方から入っている状態であつた。所が革命的空氣の乏し

「ロンドンでは、請願書の署名はやつと五十万⁽¹⁸⁾であり、議会が提案をうけいれないであろうことはほとんど明らかであった。『大会』はどうすればよいか。実力行動の準備を訴えるか？ それには右派、中央派（急進派、道徳力派）が多数を以て反対するであろう。それでは他にいかなる手段があるのか。『大会』はその無能力と權威の失墜に悩んだのである。このような時に、武裝の權利に關する抽象的宣言を發したのである。

四月の第四週『大会』は次のような宣言を發し、更に大衆の支持を拡大しようとした。

『『大会』は、民衆の確信と精力以外のいかなる希望ももたない。いかなる将来の手段を採用すべきか指示するために、聖盞降誕祭の週にできるだけ多くの週で大衆集會を開くべきである。大会の代表者は許す限りの多くの集會に出席するであらう。』

これと同時にコベット (J. P. Cobett) マンナー (P. Manningham) ウェード (A. S. Wade) 等が脱退した。彼等は一切の実力行動に反対していたからである。これらの代表の空席は直ちにバーミンガム派によって補充されたが、『大会』におけるブルジョアジーの急進派の影響力は次第に弱くなり、労働者が一層勢力をしめることになった。しかし今度は労働者階級内の実力派と道徳力派の争いがはげしさを加えた。

一方、地方では、大都市を中心として、一層昂奮は高まつてい

った。ランカシャー、ウェールズでは多数のチャーチストは武器を準備し、軍事教練を行った。四月二十九日にはウェールズではランドローズ (Llandiloes) に叛乱が起り、十七人のチャーチストが逮捕された。ニューポート (Newport) では有名な指導者ヴィンセントが逮捕された。

コンヴェンションの開會の翌日から、『大会』に露骨な敵意を示し、警告を發していた政府は、⁽²⁰⁾彈圧を開始したのである。特に危険な地域南ウェールズとイングリランド北部には特別な軍隊を送り、サー・チャールス・ネピア将軍 (Sir Charles Napier) に北部の指揮権を与えた。五月三日、内務大臣ジョン・ラッセル卿 (Lord John Russell) は地方長官、治安判事に、武器を押収し、武裝集會を不法とする権限を与え、『生命自由及財産を擁護する義勇団』 (Societies of volunteers for the protection of life, liberty, and property) を組織するよう市民に訴えた。更に政府は警察力を強化すべく、新に各都市に、地方警察を設けた。

これに対して、チャーチストは各地で一層武器を収集し、武裝を強化した。このような情勢の中でオコンナー、オブライエン等の実力派は大会を運動の中心に近いバーミンガムに移すことを提案した。ラヴェット等の道徳力派はこれに反対し、請願の運命が決するまで、ロンドンにいることを主張した。五月十日実力派の意見が勝利をしめ、バーミンガムへの移転を決定した。

『バーミンガムへの移転は、実力派の明白な勝利であつたの

で、その時以来この党派が全運動の指導者となった。』⁽²¹⁾

ロンドン大会の間に国民募金 (National Rent) は一週八六ポンドに上り、請願書はすでに百二十八万石の署名を集めていた。各地で大衆は行動に移りつつあったのである。パーミンガムへの移転を提起した実力派の勝利はこうした情勢の反映であった。

五月十三日『大会』は五万の労働者の熱狂的歓迎をうけ、パーミンガムに移った。翌日、将来の手段に関する委員会の報告を宣言の形式で発表した。即ち、

『我々がうけとつた多数の通信によれば、諸君は、人民憲章を国法とする最も有効な手段についての国の意志、意向を集めることを期待しているものと信ずる。それ故、できるだけ短期間に人民の意志と決意とをはっきりと確め、疑いもなくこの正当な目標を血を流さず、汚さずして獲得するように配慮し、我々は次の提案を慎重に考慮して貰いたいと思う。』⁽²²⁾

とのべ、七月一日を期限として八ヵ条の質問を提出した。その要旨は次の通りである。

『(1)大会の要求に基づいて各自すべての銀行預金をひき出す用意ありや

(2)同要求に基づき全紙幣を金にかえる用意ありや

(3)大会が総罷業を決定するならば、家族的に労働を中止し、禁酒する用意ありや

(4)昔からの憲法の権利に従って、祖先が残した法律と、憲法上

の特権を武器をとって守る用意ありや

(5)次の総選挙でチャーチストの候補者をおす用意ありや

(6)チャーチストとのみ取引する決意ありや

(7)全力をあげて人民憲章の大目的に向い、反対の煽動に屈しない決意ありや

(8)大会の多数の正しい立憲的要求のすべてに従う用意ありや』⁽²³⁾

この質問書には、銀行の取付のようなフランスブレース的方法も含まれているが、総罷業や武装闘争等の革命的方法も含まれていた。このことは情勢が一段と緊迫して来たことを示している。当時、各地方で武器の収集が続けられ、全国休日 (National Holiday) に関するベンボアのパンフレットや、市街戦に関するフランス・マセローニ (Francis Maceroni) の本は非常な売行をしめしていた。そして北部のチャーチストは叛乱はもうこれ以上延期できない状態においこまれていた。こうした際に大会は質問書を提起し、地方集会には、棒、矛、ピストル等の武器を携帯しないようにとの注意を発し、五月十六日休会した。

各地方の運動の中心地では、数十万に達する集会が開かれ、当局のあらゆる挑発や暴行にも拘らず、大会本部の指示通り、秩序正しく行われた。大衆はどこでも大会の提案に賛意を表明した。

この各地の新鮮な革命的息吹をもちこんで、七月一日『大会』は再開された。

パーミンガムの昂奮はまさに白熱化した。ブルリング (Bullring)

Ring「闘牛場」では当局の禁止をけつて幾度も大集会が開かれた。七月十日、『大会』は下院での請願書審議を見守るために、ロンドンに移転する予定であった。所がその前日、治安判事がロンドンからよびよせた到着早々の警官隊は、ブルリグ裏の停車場の前に集合し、折から新聞の朗読を聞いている群集におそいかかった。最初労働者は逃げ出したが、やがて引返して猛烈に警官隊を攻撃した。警官隊は四散し、二名は労働者に捕えられた。その場にいたティラーは二人の警官の生命を救ってやった。

大会のロンドン移転——それは事実上闘争の放棄であった——を前にして一斉攻撃に乗り出した当局は翌日早朝、ティラーを含む数名のチャーチストを逮捕した。更にその翌日にはティラーの逮捕に抗議したポスターに署名した康でラヴェットおよびコリンズが逮捕され、ハーニーもまたノーザンバランドで逮捕された。その間バーミンガムの街路は軍隊と警官の手に収められ、すべての店はその扉を閉じた。しかし、労働者もまた反撃した。到る処に憤怒の火が放たれ、富豪は逃亡した。七月十五日その焰は頂天に達した。この事件の報道は急速に拡まり、ニューカッスル、グラスゴー、サンダーランドその他ランカシャー、スコットランドの多くの都市で大示威運動が行われ、各地で軍隊や警官と血なまぐさい衝突が繰り返された。一方政府は大々的にチャーチスト指導者の逮捕にのり出し、オコンナーもオブライエンも逮捕された。

情勢は一刻の猶予も許されなかった。ノーザンスターは大会の代議員の十三名をロンドンに残し、他は叛乱を組織するために、地方に赴くことを主張した。

『大会が叛乱を宣言したなら革命的気分のプロレタリアートは確かにその呼び声に従ったであらう』²⁵

ロートシュタインはこう評価している。所が大会は「武装襲撃を武力を以て防衛するすべてのイギリス国民の権利の宣言」をするのが精一杯であった。すでに全国各地で政府側は勝利しつつあった。労働者の革命的気分はそがれ、絶望的散発的抵抗が各地に続いた。

これよりさき、既に二二八万の署名をえた請願書は六二ポンドの重量となり、長さ二哩に達した。これは軍旗で被われた大きな車に載せられ、下院に運ばれた。七月十二日、アットウッド、フィールデン、ヒューム等の強力な支持にもかかわらずこの請願書は二三五対四六で否決された。『大会』は長い討論の後、八月十二日を期して総罷業を行うことを十三対六を以て決定した。それは七月十六日のことであった。しかし、相次ぐ政府の攻撃の前に、総罷業は到底実行することはできなかった。情勢を察したオブライエンは、八月十二日の総罷業をやめ、その日を知的示威運動の日とすることを提案し、『大会』の自滅を救った。かくて八月二十六日、『大会』はロンドンで再開されたが、すでにその役割は終っていた。九月十四日『大会』は遂にその幕をとじた。

さて、大会の解散は悲劇の終幕ではなかつた。『その続きは、フロストのサウスウェールズの悲惨な蜂起であつた。』⁽²⁵⁾ニューポートの蜂起についてはコールも

『事実と誤とを区別することは非常に難かしい』⁽²⁶⁾といつており、ロートシュタインなどは

『我々は今日まで歴史家達がなお本気にウェールズの叛乱を問題にしているのをみて呆れるほかはない。』⁽²⁷⁾

とのべ、この事件はウィック党が政治的に利用し、ヨークシャーやバーミンガムにも組織される予定であつた叛乱の一部であるという虚構を作りあげ、チャーチスト運動全体に対する打撃にしようとしたのである。と評価している。しかし、この事件を

『ニューポートの牢獄に投ぜられていたヴィンセントを釈放しようとするフロストと彼の二三の同志の甚だ愚かな計画』⁽²⁸⁾

とのみ考えることはできない。事實はこうである。一八三九年十一月四日、数千人の坑夫が夜マンモスシャー (Monmouthshire) のいくつかの丘に集り、町を襲撃するつもりでニューポートに進出した。目的は、先づニューポートを占領し、次でヴィンセントの捕われているマンモス (Monmouth) に進軍する予定であつた。所が計画はうまくいかなかつた。共に襲撃すべき予定であつた。三隊のうち、一隊だけが間に合うように到着したが、ホテルに駐屯していた兵士の射撃によつて一掃された。数名の坑夫が死傷し、主力は山中に逃げ帰り、他の二隊とともに四散してしまつ

た。

すでに記したように、フロストは指導的なチャーチストであり『大会』では早くから実力の主張者であつた。従つて全国的叛乱計画があつたかどうかは別としても、彼が常に決定的瞬間——それは恐らく『大会』の全国的叛乱の合図であつたであらう——のために着々労働者を煽動し、組織していただであらうことは考えられるのである。所が大会はなす所なく時を過し、遂に解散してしまつた。労働者の憤激をおさへにおさえたフロストがやむなく決行したのがこの蜂起ではなかつたであらうか。愚かな計画。というには余りにも悲壯である。

ニューポートの蜂起は、新なより広汎なチャーチスト弾圧の合図となつた。一八三九年四月より一八四〇年六月に亘り、イングランドで三八〇人、ウェールズで六二〇人のチャーチストが逮捕され、放免、三月乃至終身禁錮の刑をうけた。逮捕者四四二人のうち実に四二五人は労働者階級に属していた。織物職工、金属工、鉱夫がその主要部分を形成し、残りの十七人は知識階級および商人であつた。この大きな打撃によつて、『チャーチズムはまさにうちのめされたかにみえた。』

- (1) Lovett, op. cit., p. 201.
- (2) Marx Engels on Britain, pp. 264~265
- (3) Beer, op cit., p. 42.
- (4) Ibid., p. 42.
- (5) Ibid., p. 43.

- (9) Operative, December 23, 1838
ライオンスターに於けるクロムリーの演説より
- (7) 千田前掲書 一五九頁
- (8) Northern Star, September 29, 1838. カークランド
(Kerrall Moor) のクレーンマンの演説
- Operative, March 17, 1839. クレーンマンの演説
- (9) London Democrat, April 13, 1839
- Rothstein, op. cit., S. 51
- (10) 前掲千田頁参照
- (11) Marx Engels on Britain, p. 263.
- (12) Northern Star, May 25, 1839, Selected in, Morris,
op. cit., p. 155.
- (13) G. Cole, A Short History of the British Working
Class Movement 1789~1947, Vol. I, p. 143
- (14) J. West, A History of the Chartist Movement, pp.
121~122 参照
ここでは全代議員の出身地、名前が記されている。但ラザ
スは不参加であった。
- (15) London Democrat, May 4, 1839.
- (16) Charter, April 14, 1839.
四月九日の大会決議
- (17) Beer, op. cit., p. 66.
- (18) Maccoby, op. cit., p. 188.
二月四日開会当日の署名数は五十万四千八百六十六であつた
- (19) Beer, op. cit., pp. 66~67
- (20) 大会の翌日、開院式における女王の勅語には次の言葉が
あつた。

『我國民に對して法律に反抗することをすすめ、危険で不法な行動をそのかすために我國の或地方でなされてきた執拗な努力を皆々しう氣持で注意してゐる』云。

- Times, February 6, 1839.
- (21) Rothstein, op. cit., S. 69.
- (22) Beer, op. cit., p. 68.
- (23) G. Cole, and A. Filson, op. cit., pp. 363~364.
ロンドン・スタンダード・三十九年五月十四日決議
- (24) Rothstein, op. cit., S. 73.
- (25) Hammond, op. cit., p. 270.
- (26) G. Cole, op. cit. p. 150.
- (27) Rothstein, op. cit., S. 77.
- (28) Ibid, 76. 偉大なるキートの發起 (The Newport Rising) 及び M. Morris, op. cit., pp. 156~160 参照。

3. 全国憲章協会 (The National Charter Association of Great Britain)

うちのめされたのは、チャーチズムそのものではなかった。
『チャーチズムそのものはずっしりと深く根を下し、更に枝を
広げている。それは夕べに起って、朝に亡びるものではない。』
まことに、このカーライルの言葉のように、一八四〇年の半ばに
は、早くも獄内外相呼応して、チャーチズムの再建が始められ
た。それはチャーチズムの運動が出発の頭初、地方的組織から始

つたように、地方組織の再建が最初の仕事であった。全国各地に次々に地方組織が復活した。これらはすべて全国的な共通な目的をもっていたので、一八四〇年七月二十日、その代表者がマンチエスターに集合した。²⁾ ミッドランドおよび北イングランドの代表者二十三名よりなっていた。会議はまず獄中にある同志の家族に關する決議を行った後、様々な組織計画の論議に入った。當時、コンヴェンションの失敗の経験から、組織はすべてのチャーチストの最も重大な関心をひいた問題であった。たしかに、コンヴェンションは労働者階級を中心として、多くの小ブルジョアジーをチャーター³⁾の旗の下に結集せしめ、一二八万人に達する署名を集めたことは、支配階級を恐怖せしめるに充分であった。しかしながら、何等行動の中核をもたず、強固な下部組織をもたなかったために、最も重大な瞬間には、外からの苛烈な攻撃と内部の意見の対立とで、支離滅裂となってしまったのである。この経験から、組織問題はすべての思考あるチャーチストの心をとらえていた。さて、會議は数日間の討議の後、すべての地方組織を単一の全国組織に結合することを決定した。かくして全国憲章協會 (The National Charter Association of Great Britain) が設立された。それは人民憲章の獲得を目的とし、この目的達成のためには平和的、合法的な手段のみが用いられる。そして、特に重要な点は、かなり整った組織と規約であった。協會の目的と原則を承認する者は個人的に入会を許され、會員証を交付された。會員証は

四半期毎に更新され、そのつど、二ペンスを納入した。會員はできる場合には十人の組 (class) に分けられ、各組より一名の指導者が執行委員会によって、指名された。執行委員会は七人で、書記、財政係各一名を含んでおり、毎年全會員の民主的選出で決定された。執行委員会は、各地方組織の會員によって推せんされた副書記および副財政係をもった評議員会を任命した。地方組織は州 (county or riding) 区 (ward) 町 (town) あるうは村 (village) があり、各々書記と財政係をもった評議員会がおかれた。更に規約には、執行委員の給料、財政の取扱い、各役員の権限、會員の権利義務等詳細にわたっている。ノーザンスター、スコティッシュパトリオート (Scottish Patriot) は事実上機関紙の役割をするものであった。

當時、通信条例によつて、全国的な政党的存在は禁止されている状態のもとで、以上のような嚴重な規律をもった組織をうみだしたことは、チャーチスト運動にとつて、巨大な前進を意味した。それは、労働組合や諸経営の内部における組織の問題を充分に解決せず、地域的な組織にのみ重点をおいているという欠陥はあったが、事實上、全国的な最初の労働者党であった。

一方、ラヴェットとコリンズの計画は堅固な政治運動の組織を作ることはなくて、運動を着実な教育に基づいて行おうとするものであった。一八四一年、獄中のラヴェットはコリンズの援助をうけて『チャーチズム』を書き、出獄すると『全国人民政治社

会改良協会」(The National Association for Promoting the Political and Social Improvement of the People)⁽⁴⁾を設立した。その目的は、

『(1)人民の政治的社会的改善を希望するすべての信仰、階級、意見の人々を一つの統一団体に結集すること。』

(2)人民憲章に賛成の啓発された輿論を作りこれを広めること……。

(以下略)

であり、遊説者の任命、巡回図書館の設置、農工学校師範学校の設立等の具体的手段を定めていた。しかし、この計画は彼の友人仲間から若干の支持をうけたにすぎなかった。

又或人はチャーチズムを教会の中にもちこみ、説教を通じてチャーチズムを拡めようとした。その他禁酒運動や文学を通じてチャーチズムを宣伝しようとする運動があった。獄中にある時からN・C・Aの最も影響力ある指導者であったオコンナーは『教会チャーチズム、禁酒チャーチズム、知識チャーチズム』という論文を書き、こうしたチャーチズムの活動方針に反対した。以上のように、チャーチスト運動はN・C・A以外に互いに関係のない小グループに分裂し、N・C・Aは次第に運動の支配的地位を獲得していった。

さて、チャーチスト運動のその後の発展をのべる前に、当時の社会運動全般について若干ふれなければならない。上田貞治郎氏はその著『産業革命史論』の中で『温情と自主』と題し、次のよ

うにのべている。

『チャーチストが声を大にして、天下に訴えた所の労働者の苦痛に対して、有産階級も亦無頓着では居られなかった。保守主義なる地主貴族の側にありては、此等労働者の苦痛を救済すべき政策を講ずるのが自分等の天職であるとして奮起するものあり、又自由主義なる実業家側では國家の力を以て、産業に干渉するを否とするけれども、現に存在する所の干渉政策の廃止に依つて、此の苦痛の大原因を除くべしと主張するものが現れて来た。是が一方においては、工場法の運動となり、他の一方には穀物法撤廃の運動となつて、チャーチスト運動と同時に進行しつゝあつたのである』⁽⁵⁾と。

しかしながら、この三つの運動を並列的に同じ比重を以て考えることは誤りである。一八四〇年代にあつて、現状改革運動の主たる潮流は、労働者階級の独自の要求を掲げたチャーチスト運動と中産階級の自由貿易のための穀物法撤廃の運動であつた。そして労働者階級はすでに十時間労働法と工場改革を自己のスローガンとして掲げていた。⁽⁶⁾たゞこの運動は、資本の専横に憤る、トリー党員の中に若干の同情者をもつてゐたのである。一八三三年の工場法以来、アシャーレー卿(Lord Ashley)はその中心的人物であつた。

一方穀物法撤廃は早くから産業資本家の強い要求であつた。パーミンガム政治的同盟の請願にも、それは中心的要求となつてい

た。急進的中産階級がチャーチズムに同情を有するのにも主として穀物法撤廃のために労働者階級の協力を確保したためであった。中産階級は自己の政權進出を保証した一八三二年の議会改革運動に、労働者階級がいかに大きな役割を果たしたかを知っていたのである。既に一八三〇年一月のバーミンガムの集会で「一八一五年のピール法の撤廃」が中産階級によって説かれていたのであるが、一八三六年には急進派議員ローバック等を中心として、ロンドンに、『反穀物法協会』(Anti-Corn-Law Association)が設立され機関紙『太陽』(The Sun)をもって宣伝を開始した。しかしロンドンの反穀物法協会は何等なす所なく終った。これに代ったのが一八三八年十月マンチェスターに設立された反穀物法協会であった。之が一年後に『反穀物法連盟』(Anti-Corn-Law League)としてよく知られるようになった。

一八三九年チャーチストのコンヴェンションが開かれる頃には、チャーチストと自由貿易論者との討論は白熱化していた。オコンナーは次のように論じた。

『反穀物法協会は主として労働を最も低廉な市場で買い、労働の生産物を最も高価な市場で売ることを利益とする親方製造業者からなっている。機械は常に、傭主が労働を安く買うことを助ける。……協会は機会の持主よりなっており、機械は代表議員をもたない人々の大敵である。トリー党に議会改革案を強制したのは親方製造業者の新興勢力である。そして最近十年間

彼等は改革案が自分らのために有利になるような細則を作り続けた。救貧法、自治体改革法案、地方警察法案、ウィックの治安判事任命、そして今や穀物法の廃止を要求している。』
又オプライエンは次のようにいっている。

『中産階級と労働者階級との利害の相異は橋渡しすることはできない。自由貿易は中産階級の政策で、従って労働者には何の利益をもたらさない。賃金の水準は生活必要品の価格による。それは相共に上下する。穀物法の廃止は食料品の価格を下させ、従って賃金を低下させるであろう』と。

オコンナーは機械の所有者に対する憎惡をこめて、自由貿易論のブルジョアの本性をあげ、オプライエンは、労働者階級と中産階級の利害は本質的に異なるものであることを強調し、共に自由貿易論者の労働者階級に対する甘い啗きを拒否した。この考え方は多くの労働者の支持をうけた。一八三九年のコンヴェンションでも

『現在の穀物法廃止論は労働者を最高の目的からそらすことを企図し、事実之をなす傾向があるものと信ぜられる。従って本大会は現在の重大な危機に際して人々の集中した注意が他を排して専ら国民請願のみ集中せらるべきであると信ずる。』
旨決議したのである。その後コンヴェンションの失敗にもかかわらず、チャーチズムが早くも復活の兆をみせた時反穀物法運動はその莫大な運動資金トリチャード・コブデン(Richard Cobden)

ジョン・ブライト (John Bright) のようなすぐれた組織者の活動によって、ますます精力的に労働者によりかけていた。そして、この両派の運動は、たえず激しい争いを伴ったのである。この間の事情について、フランシス・ブレースは次のように語っている。

「ロンドンで穀物法反対の演説会が開かれる毎に、百人乃至二百人の労働者は必ずその会場荒しを試み、そしてその頗末はノーザン・スター紙上に「光輝ある勝利」として報道されたのであった」⁽¹⁰⁾と。

この対立は一八四一年の選挙の時に一層激しさを加えた。N.C.A は『憲章、救貧法の廃止十時間労働および工場制度の改革、地方警察の廃止、および都市警察の市民管理、出版の自由⁽¹¹⁾』等の独自の要求を掲げて闘った。しかしながら、その攻撃はトーリーよりはむしろウィッグに集中された。ノーザン・スターには「凶悪な血に飢えたウィッグ」といった言葉さへ見出された。国民も亦永年に亘るウィッグの政治に大きな不満をもっていた。こうした空気の中で六月ロバート・ピール (Robert Peel) の保守党内閣が出現した。

一方、ノーザン・スターを中心とする極端なウィッグ攻撃に対して、ロンドンの指導者、ヘザリントン等は憲章に賛成する急進派やウィッグを支持すべきであるとし、オコンナー派に反対していた。

オプライエンは、この両者に反対し、この選挙を憲章を実現するための手段として利用し、選挙権をもたない多くの人々の挙手の指名によって選挙された実際の⁽¹²⁾大衆の代表者によって「チャーチスト議会」(Chartist's Parliament) を形成すべきであると考えていた。しかし、幾度かの中産階級の裏切に憎悪を抱いていた民衆は、ウィッグへの憤激の余り、むしろ親トーリー的なオコンナーを支持した。オプライエンは、この結果、オコンナーとも衝突を来してしまった。

一八四一年秋には、ふたたび重大な不況がおそった。特に北部の工業地帯ではその影響が大きく、四一年から四二年にかけて、ますます深刻化していった。中産階級の大部分も何等かの改革手段が必要であると考えるに至った。一八四一年八月『中産階級と下層階級の和解』⁽¹³⁾と題する論説が『ノンコンフォーミスト』(The Nonconformist) 紙上に発表され、クエーカー教徒で銀行家穀物商人であるジョセフ・スタージ (J. Sturge) によって、パンフレットとして出版された。この論文は『中産階級は参政権に対する労働者階級の要求を支持すべきであり、その代り労働者階級は憲章と暴力の話をすてるべきだ。』ということを示していた。スタージは、バーミンガム、マンチェスター等の反穀物法連盟の支持をうけ、一八四二年四月、バーミンガムで大会を開いた。これにはオコンナーに反対していたチャーチスト、ラヴェット、コリンズ、オプライエン、ヴィンセント等も出席した。大会では人民憲章の

六カ条は一つ一つ採択されたが、ラヴェット等が人民憲章の名称まで確認されることを主張したに対して、スタージはどうしてもこれを承認しなかった。しかし会議は『全国完全選挙権同盟』(The National Complete Suffrage Union)の創立を決定し、六カ条を含む請願を議会に提出した。その結果は二二六対六七で否決されてしまった。

一方、N・C・Aは四一年夏にはオコンナー、オプライエン等の釈放を迎え、活動は一段と強化された。一八四二年には会員は四万を数え、その地方組織は四百を越えた。四二年四月完全選挙権同盟が請願を提出した頃、N・C・Aも亦大規模な国民的請願を準備していた。その内容を略述すれば

「貴方方の名譽ある議會は何等全国民によつて選ばれたものではない。大ブリティン、アイルランドの人口は約二千六百万あるにかかわらず、僅かに九十万人ばかりが投票を許されているにすぎない。そして数万の人々が塗炭の苦しみに喘いでいる。請願者は

1、国債の膨脹と国税地方税の重圧に反対する。

2、救貧法を引き続き施行しようとする議会の決定に反対する。

3、アルバート公殿下が毎日一六四ポンドをうけているのに、請願者のうち数千人は二片四分の三、或いは三片で生活せねばならないような不公正に注意を払われんことを望む。

4、言論、集会、結社の自由が不当におかされ、罪なき人々が逮捕され、又憲法に反した軍隊警察の維持に多くの公共の費用が使われていることに抗議する。

5、労働者の労働時間が不当にのばされ、農業労働者は飢餓賃金に悩んでいることに注意を促し、又この国のいかなる種類の独占も存在することを残念に思う。又、生活必需品即ち主として労働者に必要な物資に課税することを攻撃するとともに独占を廃止しても、すべての独占と圧迫とを終熄させる權力を人民がもたないかぎり、決して労働を悲惨から解放しないことを我々は知っている。又、請願者は選挙権、紙幣、機械、土地、公共新聞、旅行および輸送手段、宗教的礼拝、いふことのできないほど多くの他の有害な独占に注意をむける。そしてこれらはすべて階級的立法から来ているのである……

6、不当な教会税に反対する。

7、六カ条を要求する。

8、アイルランドとの同盟の立法の廃棄(アイルランドの独立)を要求する。⁽¹⁴⁾

この請願について、ガメージは次のようにのべた。

「しかし、この第二の請願は、憲章にとゞまらなかつた。数多くの悲惨についてのべるとともにグレイトブリティンとアイルランドとの同盟の立法を廃棄することを願つていた」と。⁽¹⁵⁾このように、第一に、労働者階級の立場からアイルランドの独立

の要求を支持したことに注目せねばならない。第二に、民主的自由の要求を掲げるとともに、分配の不正、不当な経済的独占、特に生産手段の独占を攻撃していることが特徴的である。この請願書が議会に提出された時、マコーレー (T. B. Macaulay) は特にこの点に言及し、次のように反対した。

「請願書は何に反対しているか。それは国債、土地、機械および運輸機関の独占に反対する。彼等はこれをやめねばならない弊害の根源であるとしている。……それは土地、財産、機械、運輸機関即ち財産の独占が一般に廃止されねばならないという意見の表明である。それは計画的な財産の一掃的没収にあらずして何であるか」と。

彼は私有財産はすべて文明の基礎であると考えていた。従って、この独占の廃止に強く反対したのである。

しかもこの請願書の署名は四月十二日より五月十二日迄、すなわちチャーチストの二十五人の代表者が請願書の提出を準備していた時、実に三三一万五七五二の多数に達したのである。これは N・C・A がいかに広汎な大衆の支持に立脚していたかを物語るものであった。オコンナーは次のようにチャーチスト運動の発展を強調した。

「我々には四百万以上の賛成がある。我々は四百万以上である事実を見逃すことはできない。私が獄中にいた丁度一年前に、二百万と称したことは何と誇りであったであらう。だが今や諸

君に四百八十万と称することは二重の誇りではないか」と。
だが、オコンナーがその成功を誇示している間にも、経済的不況は刻々と激しさを加え、穀物法廃止にその活路を見出そうとする中産階級は、チャーチストとは異った方向に大衆を動員し、危機を解決すべく全力をあげていたのである。

一八四二年五月、請願書はトーマス・ダンカム (T. S. Dunn-Combe) によって下院に提出されたが、結局二八七対四九で否決された。しかし八月までは各地の抗議集会を除いては何事も起らなかった。所が八月突如ランカシャーに始つたストライキ運動は野火のように拡大し、急速に北部および中部の全工業地帯に広がつたのである。このストライキの原因についてはこれがむしろ中産階級の側から起されたものであることは、ほとんど疑の余地がないようである。

先づオコンナーは最初「この運動は不況に際して仕事をやめ、この不況を政治的に利用しようとする反穀物法連盟の陰謀である」と公言しており、N・C・A も積極的にストライキ運動を組織してはいなかったのである。

第二に当時は保守党のピール内閣であり、中産階級は合法性さえも半ば放棄して穀物法の廃止を強要しようと考えていた。

第三に、エンゲルスが指摘しているようにストライキの開始されたのは、七月の始めから、やや景気の上昇しつつあった時、スタリブリッジ (Staleybridge) の三つの会社が賃下げを行ったこ

に端を発していたのである。

第四に、最初のうちは罷業労働者は、ほとんど抵抗をうけることなく、マンチェスターなどは、デモ行列をうけ入れたほどであった。

ともあれ、このストライキ運動の経過をやや詳しくのべてみよう。スタリブリッジの三つの会社が賃下げを発表した際、二つの会社はやがて賃下げを撤回したが、ウィリアム・ベイリー商会 (William Bailey & Brothers) はかたくゆづらなかつた。労働者は工場を放棄し、町をねり歩き、工場から工場へと罷業をよびかけた。又一部ではボイラーの栓を外し、罷業をやむなくさせた。これが後に陰謀 (The Plug Plot) とよばれる所以である。八月八日には罷業労働者はアシュトン (Ashton) とハイド (Hyde) へ行進し、全部の工場と炭坑を休止させ大会を開いた。だが、これらの大会で議題にされたのは「正当な一日の労働に一日の賃金」 (a fair day's wages for a fair day's work) とどうこうであった。八月九日にはマンチェスターに行進し、当局との交渉によつて入市を許可されたのである。かくて罷業はマンチェスターを中心として益々拡大し、ウエールズ、スコットランドにおよびロンドンも危険な様相を呈していた。この状況をベアーは次のように描いている。

『八月第二週、ベンボアの夢は真実になつてくるように思われた。汽笛は冷くなり、炉は火が消され、動力機械は鳴りを静

め、鉱山には人影が見えず、工場のベルは静かに鳴り、どの水車も止つた⁽²⁰⁾』と。

しかし、激しい不況のもとでは、工場主達は賃下げの撤回に應ずる可能性はなかつた。チャーターの問題が賃金の問題を背後におしやつてしまつた。

『闘争の熱の中では、政治的革命的な思想が純然たる産業上の見解に優越してしまつた⁽²¹⁾』

この状況をみてとつたマンチェスターの労働組合代表者は、八月十一日および十二日会合をもち「人民憲章が国法となるまでは決して要求を撤回しないことを誓う」と決議した。又八月十五日に大代表者会議を開くことを提案し、赤字で印刷したビラをはりめぐらした。その中で次のようにのべている。

『人民憲章の法律制定によつて、我等の同胞労働者階級を、独占と階級立法との奴隷たることより、完全に解放しうるまでは我々は忍耐強く怒力を続けることを莊嚴に誓う。大ブリテンの労働組合は選挙法改正案を通過させた。大ブリテンの労働組合は憲章を通過させるであらう⁽²²⁾』と。

八月十五日ランカシャー、ヨークシャーから続々と、代表者が集つた。会議は、堂外に集つた数千の労働者の期待のうちに開かれた。議論は、総罷業を賃金の問題に限定すべきか、それとも憲章獲得のための政治的闘争に発展させるべきかをめぐつてはげしく闘わされた。結局八五人の代議員のうち後者は賛成五八、前者に賛と

成七⁽²³⁾保留十九となり、ゼネストを憲章実現のための国民的闘争にする方針が決定された。そして次の決議を行った。

『代表者は、公の会合に集り、人民憲章を実現させるためのあらゆる合法的手段をとることを、我々が代表している種々の組合の人々に推奨する。そして尚憲章が国の法律になるまで、労働をやめるといふ決議を實行することに中産階級と労働者階級との協力をうるようつとめ、代表者を全国に派遣することを促す。』と。

このように労働組合の代表者は、すでに憲章を実現しようとする労働通階級の熱烈な要求をうけ、闘いの決意を固めつつあったのである。

翌八月十七日、チャーチストは秘密のうちに代表者会議を開いた。クーパー等は、労働組合代表者の決議を支持して、断乎闘いに起ち上ることをよびかけた。ノーザン・スターの主筆ウィリアム・ヒル (William Hill) は組合の代表者会議の決議した方法に反対して、次のように語った。

『クーパーのような賢明な知識ある人が闘争を夢みるとは不思議なことである。闘争だって！ 人々は闘うために何物もってはいない。若し闘いを試みれば、砲兵によつて掃きされてしまうであろう。罷業は反穀物法連盟によつて始められた。もし、我々が罷業を拡大し、若しくは延引させることを助けるならば、我々は唯彼等の道具となるにすぎないであろう。それは

災厄と苦悩を払めるほか、何にもならない』と。

オコンナー、ハーニーもまた実力闘争の方針には反対していた。当時の階級諸関係において、興隆しつつある中産階級の圧倒的支持を得ていた反穀物法連盟はチャーチストの懸命の努力にもかかわらず常に現状を改革しようとする大衆運動の主導権とイニシアチブをとろうとしていたのである。そしてチャーチストにとって、運動の主導権を反穀物法連盟に握られることは、とりもおさず、すでに社会経済的網領を加えた人民憲章の要求の徹底的実現をすて、完全選挙権とか穀物法撤廃といった中産階級の運動の発展に従うことを意味した。それは労働者階級の独自の運動たるチャーチズムの崩壊を意味したのである。

さて、事態はどう進んでいたであろうか。自由貿易論者の主導権によつて大罷業運動は始められていた。この中で労働者階級は、ひたすらチャーター⁽²⁴⁾の獲得をめざしていた。だが、チャーターの実現、それは革命を意味するであろう。恐らく全国的蜂起か叛乱による以外、実施はできなかつたであろう。N・C・Aを中心とするチャーチストに果して、この準備と組織があつたであろうか。ヒルはオコンナーはそれを熟知していた筈である。すでに労働者の大軍はルビコンを渡っている。その指揮者は何を命令すべきであつたろう？ ヒルは退却をよびかけようとしたのである。だがこれは不可能である。労働者の革命的エネルギーを鈍らし、不信をかうのみである。代表者会議の多数は「労働組合の代

表者の決議を確認する」道を選び、次のような決議が通過した。

『チャーチスト団体は現在の罷業を始めたのではないが、英国各方面からの代表者の会議は選挙民即ち現在罷業中の労働者に深い同情を表明する。我々は人民憲章が法律に制定せられるまで、今日の闘争を詰め、又継続することに強く賛成である。そして進んでその効果を發揮するために訴えを出すことを決定し、我々は民衆の努力に対して、適当な指導を与えることを各地方に對し誓うものである。』⁽²⁶⁾

チャーチストの弁士は到る処労働者の中に赴き、総罷業を組織した。そして各地で憲章が法律にならぬうちは仕事を始めないという決議がなされた。

しかし、チャーチスト指導者が予期した通り中産階級が憲章の実現に協力することはありえなかった。「反穀物法連盟の赤熱の弁士は青白い警察官に変わった。代議員達は、ロンドンを離れ、ピールとグラハム (Graham) (トリーの内務大臣) の仕える女王の平和を守るために北部に向った。』⁽²⁷⁾ 政府は一斉に罷業地帯に軍隊を配置し、弾圧を強化した。八月の第四週、罷業は明白に衰微し始めた。飢えと弾圧に耐えかね、労働者は次第に工場に帰り始めた。政府は一網打尽の逮捕を開始し、一五〇〇人に上るチャーチストと罷業労働者が逮捕された。

一八四〇年七月以来、嘗々として築きあげて来た労働者階級のはじめての政党 N・C・A は僅か二年、未だ労働組合への働きか

けも、戦闘のための組織も整わないうちに、むざんな不意討をうけたのである。だが、その兵士達は常に労働者の先頭に起って闘い、無類の秩序と勇敢さを示したのであった。しかもゼネストを事実上政治的蜂起にかえたことは労働者階級の戦闘的武器を鍛えあげたものとして、特筆されなければならない。彼等に報いられたものは何であつたか。逮捕と投獄と失望であつた。勝利者は誰であつたか。一八三二年にそうであつたように、又しても中産階級であつた。なぜならば労働者を低い賃金に適応させるためには、一層安い生活資料をもたらしが必要であり、そのためには自由貿易が必要であることをウィックもトリーも次第に理解せざるをえなかったからである。

労働者の敗北は一八四二年秋にはすでに動かし難いものとなつた。十二月には中産階級のもとに労働者を組織しようとする前述の完全選挙権同盟の大会が再開された。大会では人民憲章の輝かしい名称を守ろうとした労働者に反対し、スタージ派は総退場した。オコンナーは礼を低くして、ラヴェットとの統一をよびかけた。だがこの時以後、ラヴェット派も運動から脱落した。今や一八四二年の総罷業の結果は明白なものとなつて来た。

「この時以来、チャーチズムは、純粹な、すつささいのブルジョアジの要素から解放された労働者の事業」⁽²⁸⁾ となつたのである。

(1) T. Carlyle, Critical Essays, vol. II, p. 110.

- ‘Charlism’ 45
- (2) Gammage, op. cit., p. 183.
- (3) N. C. A. の組織規則の Northern Star, August 1, 1840 参照。G. Cole and A. Filson, op. cit., pp. 374~380.
- (4) Ibid., pp. 380~381
- (5) 4 月 前掲 大田〜大田頁
- (6) Marx, Das Kapital, S. 420.
- (7) 『工場労働者達は 1838 年以來、すべてのチャーターを彼等の政治的な要求メローガンたらしめたのと同様に、十時間法案を彼等の経済的な要求メローガンたらしめつゝた。』
- (8) O'Connor, The Trial of Feargus O'Connor, 1843, Introduction, V-VIII. Beer, op. cit., p. 39.
- (9) Operative, November 5, 1838. Beer, op. cit., p. 60.
- (10) Charter, February 10, 1839.
- (11) G. Wallis, The Life of Francis Place, p. 376.
- (12) Northern Star, June 12, 1841.
- (13) M. Morris, op. cit., p. 154, Plan for a Chartist Parliament. 参照
- (14) G. Cole and A. Filson op. cit., pp. 381~382, The Complete Suffrage Movement, Introduction.
- (15) Hansard's Parliamentary Debates, 1842 Vol. 62, pp. 1376~1381
- (16) Gammage, op. cit., p. 208.
- (17) Beer, op. cit., pp. 135~136.
- (18) Northern Star, May 21, 1842.
- (19) エンゲルス『モウゲン』のロートシエタインも、このス

・ライキが反穀物法連盟の側からひき起されたとしてゐる。
 マンにのりつは
 S. and B. Webb, The History of Trade Unionism, p. 175.

- (20) G. Cole and A. Filson, op. cit. p. 396.
- (21) Beer, op. cit., p. 142.
- (22) Ibid., p. 143.
- (23) Ibid., p. 144.
- (24) Northern Star, August 20, 1842.
- (25) Beer, op. cit., p. 145.
- (26) Ibid., p. 148.
- (27) Northern Star, August 20, 1842
- (28) 一八四二年八月一日ロンドンチャーターにおけるチャーティスト代表者会議の決議
- (29) Morton, op., cit., p. 405.
- (30) Marx Engels on Britain, p. 269.

4. 一八四八年

一八四二年の諸事件は、すでに労働者階級が巨大な姿をもってイギリスの政治的舞台に登場しつゝあることを示した。当時、イギリスには『ウィックグ』の二大政党と、種々な中間的な色合の党派が存在していた。その一つは『ウィックグ主義とトーリー主義の中間』であり、ビールとラッセルによって代表される。他の一つは『ウィックグ主義とチャーチズムとの中間』であり、雑誌エクスaminer (Examiner) によって代表され、反穀物法連盟が

その実質的基礎をなしていた。一八四二年のゼネストの際一致して、労働者階級に立ち向った諸党派の中で、反穀物法の運動は、次第に力を得てきた。一八四三年には、実に十萬ポンドの資金が集められ、九百萬のリーフレットがバラまかれた。コブデンやブライトの演説は、新聞、リーフレットを通じて、あるいは連盟の弁士達によって、たちどころに全国に伝えられた。その結果は第一には、借地農が彼等の貴族たる地主から道徳的に解放されたことである。今までイギリスの借地農ほど政治的に無関心なものではなかった。彼等の地主はほとんどすべてトーリーであり、借地農は議会の選挙に際しては例外なく地主達の指図に従っていた。しかし、今や借地農は穀物の輸入を解放することによって、現在の法外に高い小作料を廃止し、より合理的な条件のもとで地主と新契約を結びうることを理解しはじめた。従って、農業地帯から選ばれている二五二人の地主であるトーリー議員は、従来の借地農の支持を期待できず、その政治的地位を脅かされるに至ったのである。第二には労働者大衆もまた、洪水のような反穀物法連盟の宣伝によって、安いパンの必要を叫ぶようになった。この要求は又、増大する都市人口によって激化された。こうした情勢の中で旧来のトーリーの優越にかわってピールラッセルの提携が強化される形勢にあつた。ピールはまづ様々な関税を廃止し、それを所得税におきかえた。この財政政策は、結局は産業資本家の負担を重くするものではなく、同時に、ピールを支持する土地所有者の

反対もうけなかった。しかしながらこの結果、穀物法は全く孤立した存在となり、その廃止に反対することはますます困難となつた。この間、ピールは又事態を徹底的に研究し、自由貿易の結果バルチックの穀倉から、莫大な安い小麦が輸入されるといふ土地所有者の心配は幻想にすぎないことを理解していた。一八四五年から六年にかけてのアイルランドの飢饉が起つた時には、穀物法廃止の条件は熟していたのである。これより先、一八四五年の冬トーリー党内ジスレリー派の反対にあつて、ピールは辞職した。ウィック党が内閣を組織しようとした時、突然ジョンラッセルは組閣を不可能とし、責任をピールに返した。ラッセルは、ウィックの支持によって、ピールに穀物法を廃止させ、トーリー党内に回復しがたい分裂を作り出そうとしたのである。

一八四六年二月、穀物法廃止の法案が議会に提出された。この時、内務大臣グラハムは次のように述べた。

我々は、苦しい悲惨な一八四二年——過ぎ去つた今でこそいうが、最大の恐慌と最大の危険の年——の経験をもつた。一八四二年の状況はどうであつたか。一寸それらを一べつすることを許して戴きたい。首都では真夜中に、チャーチスト集会がリンカンスインフィールド (Lincoln's Inn Fields) で開かれていた。巨大な群集が、非常に不満であり、公安に危険な精神で行動していた。……ランカンシャーの状態はどうであつたか。……あらゆる機械は止つた。苦痛な義務ではあつたが、私は毎日

のように公安の維持に關して、騎馬警察と相談した。暫くの間、公安維持のために、工業地帯の各地でひきつづき軍隊が召集された。三月月の間、私と私の同僚が経験した不安は、私が公職において嘗て感じた事のないものでありました。」と。

一八四二年の「革命の脅威」を想起することによって、この自由貿易論に転じた閣僚は、穀物法の廃止を正当化しようとしたのである。一八四六年六月、遂に穀物法は廃止された。

穀物法の廃止は一八四五—一八七五の製造業者の黄金時代を開いた自由貿易立法の一部分をなすものであった。これにつづいて砂糖から一八六〇年の錫に至るまで次々に自由貿易は拡大された。これに加えてカリフォルニアおよびオーストラリアの金の産出、鉄道と海運の世界的発達、イギリスの製造業者の凱旋行進曲の序曲たるべきものであった。又、穀物法の廃止に続いて、工場法 (Factory Act) 炭坑法 (Coal Mines Act) 一八四七年の十時間法 (Ten Hour Act of 1847) が相次で制定された。

さて、こうした情勢の中で、チャーチスト運動はどう展開されたであろうか。一八四二年の打撃は極めて深刻なものであった。一八四三年三月の巡回裁判以後は、組織されたチャーチストの数は三千四下り、ノーザンスタアの発行部数は急激に減少し、N・C・Aの財政はひつ迫した。オコンナー、ハーニーのもとに結集したチャーチストは、先づ第一に復活しつつある組合運動に注目

した。N・C・Aの創立の当初から労働組合に組織の手をのばすことは考えられていたが、それは部分的にしか成功しなかった。一八四二年のゼネストの際も、チャーチストがはつきりと労働組合を把握していない欠陥がバクロされた。この経験から労働組合の重要性が反省されたのである。ノーザンスタアには、数多くの労働組合の通信が載せられた。一八四四年十一月十六日号には、オコンナーの労働組合に対する態度が次のようにのべられている。

「私は、諸君に今や全国にわたって自己を主張しつつある偉大な労働組合運動にしっかりと着目することをすすめる。そして諸君が鉱夫組合の場合にしたように、他の組合においても行動するよう切望したい。集会に出席せよ。その数をふやせ、そして諸君の同情を表明せよ。しかし、決して彼等の前進の衝害になるような憲章をさしはさむな。あらゆる労働と労働者は団結しなければならぬ。そうすれば、彼等は、憲章こそが、彼等が成功的に結果するための唯一の基準であることを速かに発見するであろう。」と。

チャーチストは憲章をおしつけるのではなくて、先づ労働組合の統一のために闘え。これが労働組合に対する方針であった。これとらんでオコンナーは独特な土地計画を提出した。この計画はチャーチズムの再建の過程で一八四三年に出されたものであるが、一八四五年初め頃から明確な形をとって現れた。一八四五年

四月、チャーチスト協同土地協会 (Charist Cooperative Land Society) がロンドンに設立された。その目的は

『第一に王国の労働者に、搾取する資本家より独立する手段としての土地の価値を示すため、会員を収容すべき土地を購入すること、

第二に、本協会が地方的に提案するものすなわち全国的には労働者のための『人民憲章』を急速に制定することの必要性を示すこと、

奴隷化され零落させられた労働者階級の政治上および社会上的解放を完遂すること。以上が本協会の特別な目的である。』⁽⁴⁾

そのための手段として、小額な株券を発行し、その積立によって一定の土地を買い入れ、会員の一部をそこに入植させる。投資労働の結果その土地は騰貴する。今度は更にこの土地を担保として資金を得、新しい土地を買い入れる。こうして次々に会員を入植させる計画であった。

このオコンナーの計画はクーバー等の反対はあったが多くの支持者を得た。⁽⁵⁾一八四六年より一八四八年のはじめ迄に七万五千人以上の労働者が参加し、一八四八年のはじめ迄に九万六千ポンドが払込まれた。こうした労働者の期待にもかかわらず、彼の計画の破算は明らかであった。七万五千人の株主のうち、土地に入植した者は二年間に僅かに二三〇人であり、その所有地は一人当り三エーカーで、建物、倉庫、道具等をふくめて三〇〇ポンドの評

価であった。もしこの割合で七万五千人を入植させるには、六五年を要し、費用は二二五〇万ポンドを要するであろう。オコンナーの計画は土地の生産性を過大に評価し、財政的には全く不可能な計画であった。しかしながら、この運動は、エンゲルスのいうように、『もしこの運動が現在までに進ずんできたような割合でひろがり続けるならば、最後には、この運動は人民による土地所有権奪取を目的とする全国的な擾乱に転化するであろう』⁽⁶⁾という、土地貴族の不安をひき起し、『中産階級の援助を必要とせず、人民の手に握られた人民解放を可能にさせる力』⁽⁷⁾をこの運動の中に見てとったブルジョアジーの白眼視をもひき起したのである。オコンナーの計画は、たしかに、すでに工業によって克服されてしまった独立小農民を復活させようとする反動的な性質のものであった。だが、そのなかにも労働者階級が自己の力で、資本主義的競争に打ちかとうとする指向をみなければならぬであろう。又この協会はオオエンの協同組合村の計画に示差をうけているのである。当時、オーエン主義者の運動も又復活の兆しを見せ、クインウッド (Queenwood) には協同組合村が設立されていた。この運動もまた一八四五年には失敗の運命をたどった。

オコンナーの土地計画は一八四八年六月、議会の検査をうける頃には、すでにその破算は明かとなった。

これより先、穀物法を撤廃させたピール内閣の保守党内紛が起り議会解散の結果、一八四七年七、八月頃選挙が行われた。チ

チャーチストはオコンナー、ハーニー、ジョーンズ等数名の代表をたてた。オコンナーはノッチンガム (Nottingham) で指名され、大臣ホップハウスに反対して立ち、八九三対一二五七の大差で当選した。かくしてチャーチストははじめての代表をウェストミンスターへ送ることができたのである。この選挙戦につづいて、一八四八年四月の請願運動に至る間は、チャーチズムの最後の昂揚期となるのであるが、その前に、当時のヨーロッパの労働運動と社会主義の動きについて若干のべてみよう。

イギリスに始った産業革命の波動は、この頃までにはすでに全ヨーロッパをひたしていた。しかしこゝではイギリスのように、大工業が支配的地位をしめるには至っていなかったが、機械と大工業の出現、農業への資本主義の発達、階級分化をおし進めつつあった。プロレタリアートは漸くその姿を現しつつあった。プロレタリアートの進出に伴って、労働運動と社会主義の理論も発展した。フランスでは種々な空想的の小ブル的社会主義が宣伝され、ドイツではワイトリングの原始キリスト教的共産主義が力があり、『一般に労働者の同盟員はほとんどみな本来の手工業者であった』秘密の義人同盟が作られていた。この間、これらとは本質的に異った近代的共産主義が発達した。すでに『独仏年誌』(一八四四)で唯物論的歴史理論を一般化していたマルクスとマンチェスターの生活で最も発展したイギリスの階級闘争を研究していたエンゲルスとは、一八四四年九月パリで会合した。ここで二人の意見は完

全に一致し、『小ブルジョア的社会主义の種々の学説との断乎たる闘争のうちにプロレタリア社会主義すなわち共産主義』の理論と戦術が作りあげられたのである。翌、一八四五年ロンドンにハーニーの主唱のもとに『友愛民主主義協会』(The Society of Fraternal Democrats) が設立された。これはイギリスのチャーチストと大陸の亡命者からなり、活動はヨーロッパの自由のための闘争を祝福し、イギリス人民の闘いに支持と親愛の情をよせる集会を行い、宣言を発することであった。従ってこれらの活動がチャーチスト運動や与論に直接的影響を与えることは少かった。しかし、その指導者ハーニー等は、マルクス・エンゲルスと接触し、国際社会主義の理論を紹介し、又大陸の闘争を報道することによって、インターナショナル精神をよびおこし、チャーチストを激励した。そしてこの団体は、第一インターナショナル (First International) の結成に対し先駆的役割を果たしたのである。

一八四七年夏、従来の『義人同盟』は手工業的な陰謀的な伝統の殻を脱し、ロンドンで『共産主義者同盟』として再組織された。この第一回大会について、同年末第二回大会が開かれ、こゝでマルクス主義の新しい原則が承認され、その宣言『共産党宣言』一が作成された。この時ロンドンに來たマルクスとエンゲルスは友愛民主主義協会の様々な集會に出席し、あるいはノーザンスタールに寄稿し、チャーチストを鼓舞した。マルクスは『一八三〇年の

ポーランド革命記念祭」の席上次のように述べた。

「すべての国々のうちで、イギリスこそは、プロレタリアートとブルジョアジーの対立がもっともすすんでいる国である。だから、イギリスのブルジョアジーにたいするイギリスのプロレタリアートの勝利は、その圧迫者にたいするあらゆる被圧迫者にとって決定的である。だからポーランドはポーランドで解放されるのではなくて、イギリスで解放されるのである。だからチャーチスト諸君は、諸国民の解放のために、けつしてつつましやかなねがいを表明すべきではない。諸君自身の国内の敵を打倒せよ。そうすれば諸君は旧社会全部を打倒したのだというほころかな意識をもつていゝのである」と。

こうしたよびかけと大陸の革命的情勢の報道は『土地と憲章』(Land and the Charter)を目標としていたチャーチストに、徐々に政治的関心をひきおこしていた。一八四七年に始つた。国内の恐慌が経済生活の破綻をもたらし、この傾向に拍車をかけた。この時対岸のフランスに、一八四八年二月革命の焰が燃えあがつた。三月二日には、ロンドンでチャーチストの熱狂的集會が開かれ、慶祝使節をバリーの共和政府に派遣した。ロンドンでは主な集會場ではどこでも『巨大な集會』(immense gatherings)で労働者の政治家が熱弁を振つた。地方の都市にも激情は熱病のやうに拡大した。特に三月六日グラスゴーでは一時群集か街中を行進し『パンか革命か』(Bread or Revolution)『共和国万才』

(Vive La République)の喚声が響き渡つた。

熱狂はますます拡大し、数週間にわたつて或時はホールで、或時は野外で大衆集會が続けられた。チャーチストはふたたびコンヴェンションと請願の方法をよび起した。一方、ベルリン、ウィーンの革命の勃発が伝えられ、チャーチストの希望は一層増大した。

四月三日、チャーチストコンヴェンションが開かれ、四月十日大行進を行つて請願書を提出すること、請願が拒否された時は大衆集會で選ばれた代議員による国民議會(National Assembly)をえらび、憲章が法律となるまで解散しないことを決定した。これに対して、政府はさかんにスパイをつかい、特別警官を増員し、嚴重な警戒を行つてゐた。四月七日、コンヴェンションは不法に組織された団体であり、国民は四月十日の大行進に参加しないやうにとの政府の警告が発せられた。又大々的にロンドンに軍隊を集結し、十五万以上の特別警官隊を配置し、ウェリントンにその指揮をゆだねた。事態は緊迫の度を加えた。會議は連日にわたつて開かれ、請願書の署名は続々と集められた。

四月十日、政府側の狂氣じみた威圧の中に数万の群衆がケニントン広場(Kennington Common)に集つた。こゝからテームズ河を渡り、請願書をのせた裝飾馬車を先頭に議會に請願書を提出する筈であつた。だが橋という橋には武装した警官が詰めかけ、更に後方には砲兵が待ち構えていた。オコンナー、ハーニー、ジ

ジョーンズ等は次々と起つて演説し、民衆に衝突をさけるよう望んだ。かくして、大行進は平和裡に中止され、請願書は代表者によって議会に運ばれた。請願書の議会での運命はすでに明らかであったが、政府が全力をあげて企図した排発と弾圧は、賢明なチャーチストの指導によって、これを回避することができた。

コンヴェンションは、四月十日の請願行進を強行しなかつた理由を説明するとともに、次のような宣言を発表した。

「同胞諸君、最初の勝利はかちとられた。ロンドン人の勇氣は試練された——政府の禁止にもかかわらず、首都では未だ曾て見られない数の人々が集つた。……これは第一歩である。さあ我國は次の段階にそなえよう。コンヴェンションの任務は、第二の最も決定的な努力のために人民を組織することであらう。国民議會は今日二十四日に集合する。……我國は人民議會の決議を支持する用意をしなければならぬ」と。

チャーチストの指導者は新たな勇氣をもつて行動を開始した。アイルランドの独立運動者との提携を強化し、国民の再組織に力を注いだ。だが、不十分な組織と、不統一な指導のためにかえつて、闘いの陣列は乱れた。国民議會は五月十三日には解散の運命に遭い、一部のチャーチストは叛乱を企て、若干のグループが逮捕された。これに続いて一層広汎な検査が行われ、ジョーンズをはじめ九十人のチャーチストが検査された。六月にはオコンナーの土地計画の失敗が明かにされ、今や敗北は決定的なものとなつた。

た。

このチャーチズムの退潮によって、普通選挙ではなく、「選挙権の拡大」(Suffrage Extension)をめざす「新改革運動」(New Reform Movement)⁽¹⁷⁾がその発展の歩度をのびていった。コブデン、ブライト、ウィルソン(G. Wilson)等の反穀物法連盟の指導者達を中心として、急進議員ヒューム等もこれに加わつた。今や全戦線にわたつてブルジョアジーの指導は確立していった。

一方パリでは四九年六月十三日で、ドイツでは五月叛乱の失敗でハンガリーではロシアによる革命の鎮圧で四八年の偉大な革命の時代は終りをづけ反動は勝利しつつあった。

こうした困難な情勢の中で、N・C・Aの活動に倦むことのない情熱を傾けたのが青年チャーチスト、アーネスト・ジョーンズ(Ernest Jones)であった。

ジョーンズは獄中からの手紙の中で次のようにのべていた。

「私が獄中から出した最初の手紙と同様に、今でも私の唇から出る最後の言葉は「降伏ではなくて憲章！」であらう」と。

五〇年出獄以来五八年まで定期的なチャーチスト会議を指導し、又、又マルクス等の指導によって、社会主義の宣伝につくした。だがジョーンズの努力にもかかわらず、五八年にはその革命的伝統を国際労働運動に伝えながら、チャーチズムは全く解体した。この年ロバートオーエンもその生涯を終えた。三年前に狂気のうちに息を引取つたオコンナーとともに、初期イギリスの労働者階

級が最大の期待をかけた古い指導者の死は、すでにイギリス労働者階級の運動が大きく転換していることを暗示するものであった。ジョーリンズもまた六十年代にはマルクスと訣別し、中産階級の指導する選挙法改正運動の主唱者となったのである。

『一八四八年』それはヨーロッパ諸国にブルジョア革命の嵐がふきすさび、やがて中近東からアジアにかけては民族解放運動の焰をもえたさせた世界的な転換点であった。だがヨーロッパの嵐は、イギリスには一時的な熱狂をもたらしにすぎなかった。四十七年の恐慌を通りこしたイギリスは、自由貿易の黄金時代の戸口に立っていた。新しい強力なブルジョアジーは、古い昔ながらの請願の戦術で立ち向ってプロレタリアートを大げさな威圧で蹴散らすとともに、その政治的指導のもとにまとめられたのである。

- (1) Morton, op. cit., p. 405.
- (2) Hansard's Parliamentary Debates, February, 1846, Vol. 83, p. 718 sq.
- (3) Northern Star, November 16, 1844.
- (4) Northern Star, May 3, 1845 より
- (5) 『チャーチスト土地協会規約』のうちの『協会の目的』の項
- (6) Gammage, op. cit., pp. 274, sq.
- (7) エンゲルス、チャーチストの土地綱領『インファナル』一八四七年十一月一日号、*インファナル*選集第二巻下、二八〇頁この頃協会の名称は
- 全国土地会社 (National Land Company) となっていたが、この社務を検査するため議会の委員会が任命された。そ

の報告によれば、会社の会計は混乱しているがオコンナーがそれを個人的に費消していることは全くない。むしろオコンナーはこのために私財の一部を投じていたことが明らかとなった。

- (8) エンゲルス、共産主義者同盟の歴史
- ナル・エン選集 第二巻下、四三四—四三五頁
- (9) B. H. JENN, *Co., T. 21, CTP. 32.*
- (10) 目的、原則等については G. Cole and A. Filson, op. cit., pp. 401—403 参照
- (11) 一八四七年十一月二十九日、ロンドンのポーランド革命記念集会における演説
- ナル・エン選集 第二巻下 三二二—三二三頁
- (12) Gammage, op. cit., p. 294.
- (13) Macoby, op. cit., p. 279.
- チャーチストロンドンユニオン議会の決議より
- (14) 議会で請願書の審査を委任された委員会は四月十三日、署名総数はオコンナーの発表した五七〇万六千とはちがう、一七五万四六九であり、その中にはデテラメな記名と、同一の筆蹟があつたと報告した。
- そして、この請願書は十五ヶ月も経ってやっと審議され、一八四九年七月三日一二三対一七で否決された。
- (15) Northern Star, April 15, 1848.
- ナル・エン選集の宣言
- (16) Gammage, op. cit., p. 324.
- Macoby, op. cit., p. 281.
- (17) Ibid., pp. 281—282.
- (18) J. Saville, Ernest Jones, 1952,

四、チャーチズムにおける“党”

産業革命によってうみだされたイギリスの労働者階級は、個々バラバラな機械や工場の破壊から始めて労働組合の組織に進み、中産階級の急進主義者と共に、議会改革運動の政治行動を行い、更に夢のような未来をめざして労働者階級の統一組となるグランドナショナルに結集した。この多くの経験から、チャーチスト運動という労働者階級独自の社会改革をめざした大衆的政治運動が結成された。チャーチズムの第一期は、北部の新工場地帯の労働者階級を大衆の基礎とし、中産階級のラジカルズや熟練職工の知的グループの理論的指導のもとに、人民憲章の旗が掲げられた時期であった。第二期は一八三九年のコンヴェンションとその失敗を中心とする。この段階では、指導権が北部の工場労働者の手に移るとともに、ゼネスト、武装闘争によって、直接権力に対抗しようとする考え方が抬頭する。だが何等行動の中枢をもたず、大衆の組織をもたずして、上昇しつつあるブルジョアジーの勢力と闘うことはできなかった。コンヴェンションの失敗後、組織は最も重大な問題となり、第三の時期にN・C・Aが結成され、同時に労働組合との結合をはじめ、教育、教会、禁酒運動に至るまで、様々な形で大衆との結合が問題にされる。こゝにはじめて、最初の労働者党たるN・C・Aが結成されたのである。かくして

N・C・Aと反穀物法連盟の形で展開されるプロレタリアートとブルジョアジーの対立は一層鮮明な形態をとる。この対立が爆発したのが一八四二年のゼネストである。反穀物法連盟の側からひきおこされたゼネストは打ち破られ、N・C・Aは一致した支配階級の攻撃で満身創痍となった。ここでラヴェット派は終局的に運動を去り、チャーチズムはほとんど工場労働者のみの運動となった。第四の時期は、一八四八年のヨーロッパの革命が影響をうけ、ふたたび運動が復活する時期である。しかしこの時期は、ブルジョアジーの一層の進出と、チャーチズムの退潮が全体として明らかとなる。だが、ここで重要なことは、チャーチズムが国際的労働運動の一翼となり、大陸の運動と密接に連けいを保ったことである。そして特に一八四八年の大衆運動の後には、マルクスエングスルの科学的社会主義の種子がジョーンズ、ハーニー等を通じて、イギリスの土壌にまかれたのであった。

このチャーチズムの性格を明らかにするためには、その政治的運動の中心部分である、党を明らかにしなければならない。私は今までのべて来た運動の歴史的発展を中心として、(1)階級的基礎(2)組織および大衆団体との関係、(3)思想と政策の三点から、チャーチズムにおける党の性格を明らかにしようと思う。

(1)階級的基礎 運動の初期には、その指導権は、ロンドン派およびパーミingham派の手中にあった。「ロンドン労働者協会」の指導者は主として高級の熟練職工であり、ロバート、オーエン

の空想的社会主義の影響をうけ、フランシス・ブレース等の急進主義者の指導をうけられていた。又「バーミンガム政治同盟」は小ブルジョアの多くに住むバーミンガムで、中産階級の急進主義者を中心とし、これに若干の熟練職工を加えたものであった。ロンドンの人民憲章、バーミンガムの五ヵ条の請願は北部の工場地帯の激烈な大衆運動に、政治的方向を与えたものであった。かくしてコンヴェンションが開かれたのであるが、この過程で、中産階級の分子は殆ど運動を去り、指導権は北部の工場労働者に基盤をもつオコンナー派の手に帰した。これと同時に運動の内部分裂がはげしくなってきた。ニューボートの蜂起の後、地方組織の再建がはじめられ、オコンナー派の指導のもとにN・C・Aすなわち労働者党が結成されたのである。そのほかは幾つかの小さなグループに分裂してしまつた。

以上のようにN・C・Aが結成された時期にはすでに運動の社会的基盤は北部の新工場地帯にあった。N・C・Aはこれら北部の工業都市の地方組織を中心とし、全国諸地方のチャリスト組織を結集したものであった。北部の工場地帯で、運動の中心勢力となつたのは、主として繊維労働者と鉱山労働者であった。先にのべたように、一八三七年のグラスゴー紡績工のストライキと、その裁判は全国に大きな影響を与え、その代表者は、人民憲章と国民請願を可決したグラスゴー大会に出席した。又、一八四二年ゼネストを人民憲章のための蜂起にかえるよう主張したのは、マンチェス

ターの繊維労働者を中心とした労働組合の代表者会議であつた。更に一八四一年、最初の炭坑夫の全国組織「鉱夫協会」(Miners' Association)の設立には、チャリストが指導的役割を演じたものであった。この協会の一八四四年の代表者会議は、イギリスの殆ど全炭鉱地方を代表し、組合員は十万人以上にのぼつた。⁽¹⁾

又北部の工場地帯には、これらの工場労働者と並んで、機械との競争にやぶれた職人層や、農村から都市への流入者、アイルランドからの移民、激しい経済的変動によって街頭になげ出された失業者層などの所謂、窮民の層が存在していた。マルクスは次のようにのべている。

『機械が徐々に一生産部面を捉える場合には機械はそれと競争する労働者層における慢性的窮乏をうみ出す。この推移が急激な場合には機械の作用は大量的で急性的である。イギリスの木綿手織工達の徐々たる数十年の長さにわたつた、ついに一三八年に完結した破滅以上に怖ろしい光景は世界史上にみないところである。彼等のうちの多くの者は餓死をとげ、また多くの者は一日に二ペンス半でその家族とともに長い間、やっと露命をつないだ』⁽²⁾(傍点筆者)と。

一八三五年に八十万といわれた手織工は一八四二年に十万、四八年五万、五四三年⁽³⁾ともはやその残渣を残すのみとなつていた。ハモンドのいうように、彼等は『徐々に苦しみながら死んでゆく層』(a race dying slowly and painfully)であつた。だが

このことからチャーチスト運動が主として、これらの窮民層を基盤とした運動であり、チャーチズムの没落が同時に、これらの層（主として手織工など）の死滅を意味すると考えてよいであろうか。チャーチズムの階級的基礎を、以上のように考える立場から、チャーチズムが暴力主義であり、何等前進的目的をもたない後向きの絶望的抵抗であるといった見解が生れる。又このことから、多くの歴史家に共通な工場地帯の指導者オコンナーへの悪罵が生れる。しかしながら、これらの見解は全く事実の一面を捉えているにすぎない。

すでにのべたように、イギリスの産業革命は三〇年代には、基本的に完了し、新しい工場制度のもとに近代的労働者階級が存在していた。最も早くから産業革命の行われた繊維工業では尚更であった。従って初期の段階で、工場労働者とならんで、これらの手織工等が北部の運動に激情的はげしさを加えたにしても、四〇年代の運動には、その影響力は少かったと考えられる。マルクスの一八三八年に手織工の死滅は事実上完了したとする見解や、上述の四二年における手織工の十万という数は、このことを裏づけるであろう。初期の北部の運動で、ステイブンスやトリー主義者オストラーの余りにも激しい口調は、或程度こうした手織工などの悲痛な叫びを反映していた。しかし、この段階においてさえ、大衆的運動の推進勢力は工場労働者であったのである。だが、これらの労働者はたえまない経済的変動と言語に絶した劣悪

な労働条件のもとで、充分に組織されず、又明確な目標ももてなかつた。当時社会主義は未だ空想的であり『パンとフォークの問題』を解決する現実的目標とはなりえなかつた。この故に、彼等の指導者は主として古い型の熟練職工やオコンナーのように機械と工場制度に背を向ける煽動者であつた。しかしながら四二年の請願にみられるように、ここでは六ヵ条の要求とともに労働者階級の社会経済的要求が掲げられた。このことは、労働者階級がいろいろ遅れた意識をもちながらも次第に、前進的な社会改革の目標を見出しつつあることを示すものである。

このようなチャーチスト運動の最高の時期にはその階級的基礎が近代的労働者階級にあることははや明瞭である。その労働者の中で繊維労働者と鉱山労働者が中心的役割を果たした。これらの労働者を中心とし、当然のことながら運動の随伴者として、没落しつつある職人層や広汎な窮民層が運動に加わつたのである。この全体に目をむけずして没落しつつある職人層の役割を過大に評価するのは誤りである。

(2) 組織、大衆団体との関係

政党は一定の階級の利益を代表する活動的分子の結集体である。従つて、政党の代表する階級的基礎とともに、その党の組織および大衆団体との結合の關係は、大衆の要求を吸いあげ、それを一定の政治方向に指導する役割を果たすものとして、重要な意味をもっている。N・C・A、についてロートシュタインは次のよ

うにのべている。

『これは将来正式の政治的労働者党たるべきもので、選挙される執行委員会と定期大会、会費および会員名簿をもっていた。

これは前時代の運動の無定形なものに比較して、巨大な一歩前進であった。この種の政党組織は、単に個々の地方組織のみ許した法律によって禁止されていたのだから、これはそれだけ、労働者の政治的成熟を示す明白な証拠であった』と。

すでに前章でのべたように、N・C・A.の組織規約は、現在の政党に此べて損色のないほど整っており、それは多くの点で後の共產主義者同盟の組織を想起させる。しかしながら、第一に、居住地域を中心とした組織であるため、選挙や請願の組織としてはその役割を果しうるが、経営内に組織がないために労働者階級を組織的に把握し、ゼネスト蜂起などに戦闘的力量を発揮することはできなかった。N・C・A.が四八年の運動の昂揚の時にすら『請願』という古い闘争形態しかとることができなかったこと、又四二年のゼネスト等においても、労働組合を組織的に把握し秩序だった行動をとることができなかったのも、一端の原因はこの組織にあった。第二に、農村に組織をもちえなかったことは、チャーチスト運動を国民的運動になしえなかった大きな原因であった。コンヴェンションの時すら、唯一人の農村代表ドーチェスターの英雄ジョージラヴレス⁽¹⁶⁾(George Lovelass)はついに出席しなかったのである。

次に、政治的大衆運動を展開する上に、何よりも重要なことは、強固な指導的中核すなわち党とともに、この党と堅く結合した大衆組織をもつことである。チャーチズムにとって、この点で労働組合との関係は死活の問題であった。この点についてウェッブは次のようにのべている。

『ここでは、チャーチスト運動が甚だ宗教的であった者以外の筋肉賃金労働者の大部分から支持されていたにもかかわらず、一八三三—三四年の間のオーエン主義運動の時のように組合の若干はチャーター⁽¹⁷⁾の最も熱烈な支持者を供給したとはいえない。かかる時にも労働組合がチャーチスト運動の一部となったと信ずる理由はなことをいえば充分である。製靴工のような個々の職業には、チャーチズムが充分浸透していたらしく、そして常に他の労働団体をも運動に結合しようと試みていた』と。⁽¹⁸⁾
又コールとフィルソンはロンドンと北部との差異を指摘し次のようにのべている。

『ロンドンではチャーチストは多くの労働団体と全く緊密な結び付きをもっていた。特にロンドンの指導者の中ではラヴェット、ハートウェルは積極的な組合運動家であった。他方製靴工はチャーチズムの不断の支持者であった。当時他のすべての労働者階級もこのように努力していたのであるがしかしこの結合の最も重大な指標は、労働組合および他の労働者階級の団体によって支持された週刊紙として『チャーター』(Charter)を

設立した組合運動家の委員会であった。

北部では鉱山労働者の間を除いては、一八四二年まで、労働組合とチャーチストとの形式的結合の証拠はほとんどない。しかしオコンナーに従った大衆は大部分一八二八年と一八三四年の偉大な労働組合の昂場に参加した大衆と同じであった。ノーザン・スターは労働組合のニュースに大きなスペースを与えていた⁽⁷⁾と。

たしかに、ウェッジ等のいうように、労働組合が組合全体としてチャーチスト運動に支持を表明したことは少かった。ノーザン・スターは次のようにのべている。

「多くの労働組合員は疑いもなくチャーチストでもあったが、労働団体は全体としては明らかにチャーチスト運動の外にあった。チャーチストコンヴェンションの指令で、諸団体をその基金や存在を危くするまで勧誘することはできなかった⁽⁸⁾」と。

では、なぜ、大部分の筋肉労働者が支持し、組合員もまたチャーチズムの支持者であつたにもかかわらず、組合としての支持が少なかったのであろうか。第一に、特に北部では、南部とは比較にならないほどの弾圧と、経済的窮迫の中で、恒常的な組合運動が發展せず、確固たる組合が多くは存在しなかったことによるであろう。ウェッジは一八四二年当時、組合労働者が全国で十万人に満たなかつたといっている⁽⁹⁾。北部の二十万、三十万に上る頻々たる集会や大衆運動の中では、数万の組織労働者の寄附金や声明の

形式的結合は大きな問題にはならなかつたのではないか。北部の運動はこうした組織された労働者の日常的活動を中心としたものではなくて、より激情的、街頭的性格をもつていたのである。従つて、チャーチストにとって、重要なことは、先ず着実な、強固な組合を作りあげ、労働者を組合に組織することであつたのである。第二は、特に運動の後期になつて目立つてくるのであるが、オコンナーの土地計画のような反動的政策に主として熟練工よりなつていた当時の組合労働者が背を向けたことである。蒸気機関製造工組合は、その或支部がオコンナーの土地銀行に支部基金を預託したことを理由に権利を停止し、石工組合の二支部の出資の提案も他の支部によつてはげしく拒否されている⁽¹⁰⁾。こうした状況の中で、オコンナーは一八四六年、獄中にあるチャーチストの救援運動に対して、イギリスの組合が示した無関心をなげいて次のようにのべた。

「これ等の人の受難に対して、イギリスの諸組合が示した以上に犯罪的な無頓着は未だかつてなかつた⁽¹¹⁾」と。

このように、大部分の労働者がチャーチターの支持者でありながら、しかも組合としては、むしろオコンナー等の政策に対して支持を与えなかつたのである。

以上のことから明かなように、チャーチストと組合との問題は、その形式的結合があつたかどうかではなくて、より根本的に、日常的な労働者の利害を出発点とした組合を結成し、組織され

た労働者による、チャーターに対する不断の支持をうることが問題であったのである。こうした点で、チャーティスト党は、二、三の例外を除いては組合との結合を強め、経営の中に、しっかりと根をおろすことに成功しなかった。

又、その他の大衆団体—宗教、教育から禁酒運動に至るまで—の中で若干の活動がなされたが、労働者階級を除いては決して広汎な支持を獲得することはできなかった。一八四二年、『ライン新聞への通信』の中でエンゲルスは次のようにのべている。

「……チャーチズムは未だイギリス人の教養ある人々の国には全く根をはることができていない。又直ちに張りえないであろう。もしイギリスにおいてチャーチスト派および急進派という場合、人は殆ど大抵の場合、その下に国民のカス、プロレタリアの大衆をば理解する⁽¹²⁾。」と。

この大衆団体との結合の不充分さは、組織的な欠陥であるとともに、労働者階級を統一し、広汎な大衆の支持を獲得する理論と政策にかけていたことも重大な原因であった。

(3) 理論と政策

チャーチズムには一貫した理論とそれを実現する政策とがなかった。又チャーチズムが多くの党派に分裂した結果として、各指導者によって多くの対立があり、その理論と政策にもかんがりの矛盾や混乱がみられる。これは労働者階級の統一と広汎な大衆の支持をうることを困難にした原因であったが、同時に、労働者階級

の未成熟を反映するものであった。しかしながら、我々が労働者階級の発展の過程を、全体として考察するならば、矛盾と混沌の中にも、そこには一筋の光明が次第に輝きを増し、やがて労働者階級を輝かしい未来へと導く、理論の発展をみることができるのである。先にものべたように議会改革運動（前号参照）は、労働者階級が、本来旧い封建的特権に対する市民階級の権利の宣言である天賦人權の自然法思想や社会契約論の理論的武器をとり、新興の市民階級の一翼をなして闘ったものであった。だがその結果は、ブルジョアジーは自己の政治的地位を強固にし、一步一歩土地所有者に譲歩を強要しつつ、穀物法撤廃運動から一八四六年の穀物法の撤廃に至る政治コースを歩んでいった。この選挙法改正と穀物法の撤廃はブルジョアジーの政治的経済的勝利を不動のものとした。この場合彼等の旗印は「最大多数の最大幸福」というジュレミー・ベンタムの功利主義思想であった。一方、裏切られたプロレタリアートは次第にその階級的地位を自覚しつつ独自の政治勢力として自己を結果集めていった。この場合彼等の理論的武器は一八三二年の選挙法改正のギマンによって汚された天賦人權や社会契約の思想を浄化したものであり、当時すでに発展していた小ブルの空想的社会主義の理論であった。チャーチズムにあっても、これらの理論は到る処に見出される。先づ六カ条のチャーター¹は、それ自体としては急進主義の政治綱領である。ついでコンヴェンションの決議に、請願文に……。指導者の演説に……。こ

れらを買くものは『神の無償な空気を呼吸し、神の無償な土地に住む各人が家や妻子をもつ權利を認め、貴族の作つた權利に対すると同様に各人にこの權利を保証する』ことを要求する天賦人權の思想であり『政府は全国民より生じ、全国民の自由を擁護し、幸福を増進するために作られ、全国民に責任を有すべきものである』⁽¹³⁾といった社会契約の思想であつた。そして、もし支配者が基本的人權をおかすならば当然人民の武装する權利 (the people's right to bear arms) が行使されてよいとするものであつた。これと同時に、反穀物法連盟に鋭く対立したチャーチストの經濟理論や、コンヴェンションの正式な名称『勤勞階級の全体會議』(the General Convention of the Industrious Classes) の中に、あるいはオコンナービルの計画の中にさえ、嘗て自由な農民が特權身分に対して闘つた過去の魂とともに、オーエン主義の思想が深く滲透している。だがこのことは政治的急進主義とオーエンの社会主義とがチャーチズムのなかで完全に一体化していることを意味するであらうか。そうではない。オーエンは次のように云つてゐる。

『チャーチストはいま迄空気を打つて來たし、今でもそうである。即ちドンキホーテのように水車と闘つて來たし、今でも闘つてゐるのである。政治的變革はそれが同時に社会的變革をもたらさないものなら無益である』⁽¹⁴⁾。又

『チャーチストは富有な階級に向つて憎惡と敵意の種を蒔いた。

そしてこのことによつて社会主義の國の到來を延引させた。なぜかなら愛と正義の世界へは、憎惡の砲門をくぐつては到達しないからである』⁽¹⁵⁾と。

チャーチストは政治的變革は社会改革の手段であり、政治的變革は階級闘争の戦場を通じてのみ到達しうると考えていた。一方オーエンの社会主義は、政治的變革に背を向け愛と正義による平和的な社会改革によるユートピアをといつてゐた。このチャーチズムの階級闘争を基調としたすぐれて政治的な性格と、オーエンの社会主義の平和的社会改革をめざして空想的性格とは常に相反していた。又背反のもう一つの原因は、機械と工場制度に対する態度の中にあつた。オーエンがすべて機械と工場制度をその出発点としてうけいれてゐたのに対して、チャーチストは機械に対する憎惡をぬぐいさることはできなかった。イギリスやアメリカの革命に対して、その社会的意義を正しく把握し、又オーエンの社会主義の空想的性格を鋭く衝いてゐた『チャーチスト教師』オブライエンですら、そうであつた。

『私は諸君の庄迫者が諸君を耕作農民から工場労働者に変じた制度を非難する實際またそれが諸君によつて非難されることを希望する。私は農業に対する工業の優勢を作り出し、權力を貨幣貴族の成り上り者に移した制度の敵であり、諸君を生れ故郷から追い出し、そして中世紀の貴族が諸君の祖先に対してなしたと同じように彼等の私慾の奴隸たらしめた制度の敵である』⁽¹⁶⁾

と。

では、どうすればよいのか。ノーザン・スターはいう。

「各人が頭の上に尾根を有し、彼の食物置場を、一片の土地を、穀倉を、燧石銃を所有しているなら、外国の敵も、国内の暴君も敢て住居に侵入したり自由人たるの権利を侵害しないであろう」と。

オーエンの社会主義がその空想的性格の故に現実には役立たないとしたら、機械と工場をもたらした資本主義制度を变革して、到達しようとする目標は、それを過去のありしよき日に求めざるをえなかった。オコンナーの土地計画はこうしたチャーチズムの一傾向を最もよく再現したものであった。

だが、このような混乱した思想と政策をうみながらも、急進主義を旗印としたチャーチズムは次第に本来の社会的性格を現していった。チャーチズムの大衆的基礎をなした北部の工場労働者の運動は、『ナイフとフォークの問題』から出発したのである。スティーブンスの

『憲章とは即ち、よい住宅、よい飲食物、よいくらし、みちかい労働時間のことである』⁽²⁰⁾

といった言葉は、最もよく労働者の要求を表現していた。この傾向は、工場労働者が運動の指導権を握るにつれて、次第に明らかになった。一八四二年の三百万以上の署名をえた請願書および一八四八年の請願書は、六ヶ条の政治的要求だけではなくて、労働

時間の制限賃、金の増額、経済的独占の廃止等の社会的経済的要求を含んでいた。エンゲルスは次のようにのべている。

『ナイフとフォークの問題』は一八三八年にはチャーチストの一部のものにとつただけ真理であつたが一八四五年にはすべてのチャーチストにとつて真理である』と。

そしてエンゲルスはチャーチスト運動のこの傾向の中に将来、社会主義を自己のものとし、『真にイギリスの支配者となるべき労働者階級』への期待をもち『真にプロレタリア的な社会主義はたしかに、それも近い将来に、イギリス人民の発展史において重大な役割をうけもつ』⁽²¹⁾確信を抱いたのである。

オーエン的な空想的社会主義ではなくて、プロレタリア的な科学的社会主义理論は、イギリスの労働運動を詳しく研究したエンゲルスと、すでに『独仏年誌』に史的唯物論の見解を発表していたマルクスとによつて、その基礎を据えた。それは一八四八年には『共産党宣言』となつて発表された。この間チャーチスト・ハーニー、ジョーンズは密接にマルクス・エンゲルスと連絡をとりつゝ、イギリスの労働運動に社会主義理論を結合させるために努力した。しかし、大陸では社会主義が着実に発展している時に、イギリスでは、労働者階級は組合主義のわくの中で、より多くの利潤の分前を主張し、政治的には大自由党の後につき従つた。イギリスの労働者階級がチャーチズムの革命的伝統をとりもどし、社会主義を自己のものとするためには、イギリス資本の工

業における独占が崩壊する八十年代をまたねばならなかったのでも。

- (1) S. and B. Webb, op. cit., p. 182.
- (2) A. Hutt, op. cit., p. 21.
- (3) Marx, Das Kapital, S. 453
- (4) P. W. Slosson, Decline of the Chartist Movement, p. 131.
- (5) Rothstein, op. cit., SS. 78-79.
- (6) ヒーホキター事件の青年指導者、前号七一頁参照
- (7) S. and B. Webb, op. cit., p. 175
- (8) G. Cole and A. Filson, op. cit., pp. 391-392.
- (9) Northern Star, August 20, 1842.
- (10) M. Hovell, The Chartist Movement, 1918, p. 169
- (11) Webb, op. cit., p. 176.
- (12) Ibid., p. 178.
- (13) Northern Star, August 24, 1846. (Webb, op. cit., p. 177)
- (14) ヲルクス・エンゲルス全集(改造社版)第二卷三六〇頁
- (15) Northern Star, September 29, 1838.
- (16) カール・マルクスにおけるメーニンゲンの演説より
- (17) Toybee, op. cit., p. 226.
- (18) 近世西洋労働運動史(叢文閣版)六八頁
- (19) オプライエンは、革命的チャーチスト議会の計画を発表したり、又歴史の発展や階級闘争についても部分的にはすぐれた見解をもっていた。チャーチストの中で最もすぐれた理論家の一人であった。これについては次の諸論文参照

London Mercury, May 7, 1837 (Morris op. cit., pp. 161-162)

National Reformer and Manx Weekly Review, January 30, 1847. (Morris, op. cit., p. 190)

(21) National Reformer and Manx Weekly Review, January 7, 1847. (Rothstein, op. cit., S. 57.)

(22) Northern Star, July 20, 1839. (Rothstein, op. cit., S. 57.)

(23) Marx Engels on Britain, p. 265. クォーターンズの言葉。

(24) Ibid., p. 270.

五、むすび

さて、私は以上の叙述によって、イギリスの労働者階級が、いかにして階級として結成され、その独自の労働者党をうちたてたか、又その党は階級闘争の戦場でどんな役割を果したかを考察して来た。このような観点からはチャーチズムが、単なる早熟な議会改革運動であるとか「徒らに社会不安の醸成に役立つだけに終った」運動であるといった見解は否定されるであらう。チャーチズムの党はたしかに、未成熟な不完全なものであった。組織的には雑多な労働者階級の要素を統一できず、工場の経営や農村の中に根を下すことができなかった。思想的には一貫したものをもちず、又不統一と分裂は甚しかった。戦術の上でも諸願、ゼネスト

武装蜂起、議会闘争などをうみだしながら、それらは統一的に運用されず、かえって力の分散と不統一を激化させてしまった。しかし、こうした未熟さは労働者階級の若さの反映であった。当時の労働者階級は、自分自身の階級的地位の自覚には達していた。しかし「他のそれぞれの社会階級の知的、精神的、政治的生活の一切の現れ」「また住民のすべての階級、層、集団の活動と生活のすべての側面」について理解し、支配階級を打倒する階級闘争の戦略と戦術を認識するには至っていなかった。又、本質的には社会的変革をめざしたチャーチズムにあつては社会主義への指向をもちながらも、それは労働者階級の政治闘争の目標とはなりえなかった。こういった意味でチャーチズムの党は労働者党ではあつたが、それは社会主義的労働者党ということとはできない。労働者階級が真に自己の解放をかちとるためには、資本主義の賃金奴隷制を打倒し、社会主義を建設する以外にはありえない。又社会主義の理論は労働者階級の運動と結合しないかぎり一つの力とはなりえない。マルクス主義の党はこの両者を結合した科学的社会主義の理論によつて武装された労働者階級の党である。チャーチズムの党は、このような党ではなかった。それはイギリスの労働者階級が長い苦難な闘いを通じて作りあげた自然発生的な階級政党であつた。だがこの歴史的経験を通じてはじめて、マルクス・エングルスによつて、科学的社会主義の理論が完成され、その党の基礎が据えられたのであつた。この時以来、全世界の労働者階級

は一步一步社会主義をわがものとし、その政治的勝利をかちとていったのである。今日すでに、社会主義制度は地球の三分の一を被わんとしている。チャーチズムは、いはば、このような全世界の労働者階級の革命運動の先駆的な地位をしめるものであつた。

- (1) 小松芳喬 英国産業革命史 二四二頁
- (2) B. И. Ленин, Т. 5 стр. 383.

§ 前号の論文の正誤表を左に掲げよう。

誤

正

五八頁上段

ロンドン急進改革協会

六二頁下段 下院

六四頁上段

かくして一八三一年十月

第三次案が

七一頁下段

七人の農業労働者

七四頁註(21) 七人

トロバドール

ロンドン通信協会
上院

かくして、先にものべた通り

第二次案が

六人の農業労働者

六人

トロバドール